
架空艦隊出撃せよ！！

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

架空艦隊出撃せよ！！

【Nコード】

N2725C

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

この作品では、ちまたにあふれる架空戦記などに登場する艦艇や航空機、戦車などを紹介していきます。そのため人間は出ません。あくまで説明形式の作品ですご注意ください。

pixivの方にも転載中です。

海上自衛隊潜水艦SS707「うずしお」

このシリーズは、巷に溢れている様々な架空戦記に登場する艦艇を紹介していく物です。また、番外として戦車、航空機、列車や兵器もあつかいます。なお、扱う物は作者の趣味によります。

栄えある第一弾はこの艦です。

海上自衛隊潜水艦SS707「うずしお」

全長95.2m 排水量2410t 速力水中22ノット 水上20ノット

武装53.3cm魚雷発射管10基

5インチ砲1門

スキップジャック1基

12.7mm機銃

限界潜水深度200m

準同型艦 SS708「ゆきしお」SS709「せとしお」

この艦は、小沢さとし先生作の『サブマリン707』に登場した潜水艦です。設定上はアメリカから供与されたガトー級潜水艦という設定になっています。

データは通称707改と呼ばれる改装後の形態を表しています。艦首と艦橋の改良によって大幅な速力アップを実現したことになります。また、5インチ砲には揚弾機が装備されています。加え

て、艦後部に装備されたスキップジャックは、対潜対艦用の連発可能な小型ロケットで、小沢先生考案の独自の兵器です。水中での発射も可能で、目標を自動追尾発射する機構も備えています。機銃は艦内に収納されていて、水上砲戦の時のみ使用されます。

これらの装備、ならびに旧海軍以来のベテラン艦長である速水一佐の指揮のもと竣工後20年経っていたにも関わらず、対U結社戦で大活躍することとなりました。

また、第2シリーズでは後部に小型潜水艇ジュニアの母艦となっています。

ちなみに、707という番号は掃海艇に割り振られる物で、当時一世を風靡した旅客機B707からとったとされています。

準同型の708と709は艦形こそ酷似していますが、砲は天蓋つきの速射砲となっています。

作者の私見としては、この艦の活躍にはハラハラしましたが、やはり改装後の性能が極端に高くなっているのが腑に落ちませんでした。また、改装もわずか1ヶ月で終わるという漫画ありがちな細かい設定の無視が見られます。しかし、昭和30年代の当時にあつては貴重な潜水艦が主役の漫画で、用語普及などの観点で見ればその偉業は確かなものです。

帝国海軍軽巡洋艦「綾瀬」

第二弾はこの艦です。

帝国海軍軽巡洋艦「綾瀬」

全長174.5m 排水量6652t 速力35ノット

武装10cm連装高角砲6基12門

8cm連装高角砲4基8門

25mm三連装機銃8基24挺

61cm四連装魚雷発射管1基4門

この艦は米田淳一先生の「スーパー防空巡洋艦綾瀬」という67年前に発行された作品に登場した艦です。戦艦でも空母でもなく、対空巡洋艦に焦点を当てた珍しい作品です。

作中で「綾瀬」は帝国海軍初の防空巡洋艦として建造されています。建造計画は巡小で、艦体は「阿賀野」型と共通という設定で、さらに最新鋭の99式、3式高射指揮装置を搭載し、米軍機相手に大奮戦します。

実際の日本海軍では高射指揮装置、つまり敵機のスピード等から対空砲の方位、仰角を計算する装置の開発が遅れ、米軍との間に大きく遅れをとりました。

この作品ではそこから改善されていて、実際「綾瀬」が次々と敵機を撃墜する描写が書かれています。ただこの高射装置は繊細で専門の要員がいないと扱いきれないという日本の機械らしい設定もちゃんとあります。作中ではそのため優秀にも関わらず、「秋月」型では旧式の98式高射装置を搭載しています。

戦歴はミッドウエー、ソロモン、マリアナ、レイテ、そして沖縄特攻作戦に参加し、米軍に拿捕され戦時賠償艦としてソ連に引き渡されています。

この小説自体は艦に現れる少女の幽霊や、未来から現れる介入者など、かなり幻想的な話です。

作者の私見では、艦自体は別段無理のない設定でかなり真つ当な設定です。また小説自体は作者が沖縄への研究旅行中に買って読んだもので、幻想的な内容とともに印象深い作品です。ただ戦闘シーンの迫力と描写が今ひとつという所でした。

帝国海軍輕巡洋艦「綾瀨」（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

それにこの艦を載せてほしいという意見もござい

東露西亞帝國海軍砕氷戦艦「ピョートル一世」

東露西亞帝國海軍砕氷戦艦「ピョートル一世」

全長160m 排水量24200t 速力20ノット

武装36cm連装砲4基8門

15cm連装砲6基12門

10、2cm連装砲4基8門

同型艦「エカチエリナ2世」「イワン4世」「アレクサンドル3世」

まず所属国の東露西亞帝國という国名事態に疑問を呈した読者もいたでしょう。実はこの国自体が架空の国家です。

この戦艦は高貫布士先生の「双頭鷲の紋章」という作品に登場しました。この作品も8年程前に出た古い作品です。

この作品では、アメリカへの売却が中止になった露西亞領アラスカに、救出作戦によってロシア革命を辛くも逃れた皇帝の末娘が、多くの王室財産をもって帝国派のロシア人と共に東露西亞帝國を設立し、反共主義の日本やイギリスのバックアップの下、その王室の資産目当てに押し寄せるスターリン率いるソ連赤軍と戦うという内容です。

作品内では、この東露西亞帝國は陸軍力の不足を海軍力でソ連に對抗します。しかし、極寒の北太平洋は冬には氷結し、その海軍力も有効に機能しません。その隙を突いて、凍ったベーリング海峡か

らソ連軍が攻めてきます。奮戦する東ロシア軍。しかし物量に勝るソ連軍はアリューシャン列島の小島を次々と占領し、アラスカに迫ります。その状況打破のため、日本に発注されたのがこの戦艦です。

主砲は伊勢型と共通の物で、挿絵で載っている艦影からは艦橋が高雄型に酷似していることがわかります。そして設計は作中では技術研究所に左遷されていた平賀譲造船中將が行っているとしています。ご存知、軽巡「夕張」や重巡「妙高」を設計した技術者です。

またこの東露西亞帝国では人口不足から、多くの傭兵や派遣軍人によって軍を維持しています。そのため、この艦の艦長も伊藤整一帝国海軍大佐が務めています。史実ではあの「大和」を旗艦とする沖縄水上特攻艦隊の司令長官を務め、戦死した人物です。

私見では、特に武装などに注目すべきところはありません。しかし、砕氷戦艦という異色の艦であることは特筆すべきことです。作中では戦場視察する皇帝自らを乗せ、氷を打ち砕きながら進み、狼狽する赤軍相手にその36cmの巨弾による鉄槌を下すシーンは男として燃える物があります。

作品の設定としてはとても面白い物があり、太平洋戦争後までどうなるかと期待する物がありました。が、売れ行きが不審だったのか、それとも作者が行き詰まったのか、わずか3巻で中途半端のうちに終わってしまったのは残念でした。

東露西亞帝国海軍砕氷戦艦「ピョートル一世」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍高速打撃艦「多良」

帝国海軍高速打撃艦「多良」

全長 データ無し 排水量 8200 t 速力 28 ノット

武装 40 cm 連装砲 1 基 2 門

7.5 cm 単装高角砲 10 門

20 mm 機銃 10 挺

零式水上偵察機

同型艦「由布」「三方」「背振」「開聞」

注 データは建造時のもの。作中では幾度か改装されスペックが変わっています。

多くの人が高速打撃艦とは何ぞや？と思われるかもしれませんが、それもそのはずです。この艦は1997年に刊行された羅門祐人先生の『独立愚連艦隊』に登場した先生考案のオリジナル艦です。

この愚連艦隊というのは、ワシントン条約で実験艦籍に回された「陸奥」が空母に改装され、その「陸奥」を中心に編成された艦隊を指します。

名前のとおり、乗員は海軍刑務所行き一歩手前の者や何らかの問題を有する者ばかりで編成されています。

その「陸奥」を改装した海南造船所に対し、海軍は撤去する武装全てを他艦に流用するよう命令しました。しかし、40 cm 砲を流用しようにも海南に戦艦建造のノウハウがなく、また予算も不十分でした。そこで彼らが注目したのが英海軍のモニター艦であったの

です。

モニター艦とは第二次、第一次両対戦で使われた陸上支援用艦艇のことで、喫水の浅い船体に大口径砲を1、2門積んだ船のことです。もちろん、海洋での海戦は想定しておらず、史実でも専ら対地支援を行いました。

しかしこのモニターと高速打撃艦とは根本的に違う点があります。

まず運用するのが太平洋であることです。そのためか、船体は建造中だった7000t級高速貨物船の物を改装して流用している。

また砲塔は固定式とされ、俯角と仰角しか取れないと言う設定です。だから使い勝手が非常に悪いのです。作中でも上陸支援ぐらいにしかならないとしています。加えて高角砲も陸軍の物を借用し、ただ甲板に固定しただけ、そして機銃は零戦用の20mm機銃を流用した物とされています。

私見を言わせて貰えば、まず主砲の40cm砲は、ある解説本では衝撃に艦体が絶えられないという指摘がありましたが、これは装薬の火薬を減装して解決できます。

また、作者は日本の20mm機銃を小便弾しかでないと酷評しているが、アメリカ海軍も同じ機銃を艦艇の対空戦闘用に流用していることを端から失念していたようです。

話の内容自体は一巻を除いて完全にスチャラカ戦記で、架空戦記の中では異色の作品です。ただ個人的にはお気に入りです。

帝国海軍高速打撃艦「多良」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

海上自衛隊多目的偏向翼機「海鳥」

今回は初航空機です。

海上自衛隊多目的哨戒偏向翼機「海鳥」

全長12,1m 全幅13,7m 自重3,7t

速力450km 航続力800km

発動機T700-1H1-701C 1800馬力2基

武装20mmバルカン砲1基

他ミサイルなど

この機体は大ヒットの内に連載を終了した巨匠、かわぐちかいじ先生の「ジパング」に登場した機体です。

ミッドウェイ海戦へとタイムスリップした海自の護衛艦「みらい」に艦載機として登場していた可変翼機です。

同作品の解説版では、実際の世界においても開発中の米国の可変翼機V-22「オスプレイ」を母体に、開発したとされています。ただし、オスプレイよりも遥かに小型で、ヘリに近い容貌を持っています。

乗員は2名。アパッチかコブラを思わせる操縦席を持ち、前席にガンナー、後席に操縦士が乗ります。

装備されている20mmのバルカン砲は高い射撃能力を持ち、実際に投下された爆弾を補足、撃破しています。また作品内での描写

はありませんでしたが、必要ならばミサイルや対潜爆弾の装備も可能とされています。

可変翼による垂直離着陸能力を持っているので、護衛艦の狭いヘリ甲板での運用も可能です。それゆえ艦載機として高い能力を持ち、作中でも偵察・対潜哨戒に大活躍しました。加えて運動性能も非常に高く、小笠原での空戦では帝国海軍の2式水戦2機を撃墜しています。

私見としては、まず翼に装備されたプロペラへ胴体のエンジンからエネルギーがちゃんと伝わるのか疑問でした。また、最大速度450kmも少し遅いのではないのかと思います。

現に小笠原で海軍の2式水戦に追いつかれ、銃撃されています。

それ以外では縦横無尽に活躍する姿は大好きでした。だからシリーズ半ばで主操縦士の佐竹一尉とともに戦没したのが大変残念でした。

ちなみにこの機体は架空機としてはめずらしく、食玩で模型化された機体もあります

海上自衛隊多目的偏向翼機「海鳥」(後書き)

御意見・御感想おまちしています。

中華民國海軍装甲艦「福州」

中華民國海軍装甲艦「福州」

全長186m 排水量11700t 速力28ノット

武装 28cm三連装砲2基6門

15cm単装砲8基8門

10.5cm砲4門

37mm機関砲8門

20mm機関砲6挺

53.3cm四連装魚雷発射管2基8門

水偵2機

同型艦「蘭州」「広州」

今回は初めての（実在する国の）外国艦です。もし軍艦に詳しい方なら、このスペックを見てあれっと思うかもしれません。この艦は高貫布士先生の「北冥の海戦」に登場した艦です。

もうおわかりの方もいるかもしれませんが、実はこの艦、作中では蒋介石がヒトラーから購入したアドミラル・シュペー級装甲艦（ポケット戦艦）という設定になっています。

この話の中では英独海軍協定で、ドイツは再軍備を認められる代わりにポケット戦艦の破棄を条件とされたため、やむなく売却することとなりました。

そしてそれを購入したのが、当時日本との戦争で海軍力を紛失していた中華民国でした。

3隻はドイツ側と中国側の回航員によってパナマ運河を抜けて太平洋に回航され、そして日本海軍の追跡を逃れて、給油地のウラジオストツクから中国本土へ向かいます。

もちろん日本側も黙っているはずがなく、全力で攻撃をかけます。そしてその主力となったのが九六式陸攻を中心とする航空部隊でした。そして最終的に3隻中2隻が撃沈され、残る1隻も浦塩からの脱出が不可能となり、そのままソ連によって抑留、拿捕されてしまい、3隻が中国に渡ることにはなかったということです。

ちなみに、装甲艦だけでは海軍としてアンバランスと思われる方もいるかもしれません。

しかしそのあたりの考証もしっかりしていて、ちゃんと駆逐艦や潜水艦のドイツからの追加契約があるという設定になっています。

私見としては、アヘンを吸って任務がままならない中国側水兵の様子や、96陸攻をドイツ製の機体と見間違え、撃つのを躊躇するドイツ水兵の描写が中々リアルに思えました。また、ドイツ装甲艦対日本陸軍要塞の砲撃戦もあるのが面白いです。

まだ発刊から時間もたっていないシリーズなので、一度是非ご購入をお勧めします。

中華民國海軍装甲艦「福州」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍実験空母「陸奥」

帝国海軍実験空母「陸奥」

全長225m 排水量34000t 速力30ノット

武装12.7cm連装高角砲4基8門

25mm連装機銃10基20挺

搭載機80機

（上記データは空母化改装時のもの。その後数回の改装を受けている）

この艦は以前紹介した高速打撃艦「由布」と同じく、羅門祐人先生の独立愚連艦隊に登場した艦です。

作中での日本はワシントン条約における「陸奥」廃棄勧告を受け入れており、そのため「陸奥」は戦艦ではなく武装無しで新兵器や各種装備の実験艦として竣工します。その後昭和8年に爆発事故によって上部構造物が吹き飛んだため一時廃艦も検討されましたが、最終的に民間に空母建造の経験を積ませるために、民間の海南造船所で空母に改装されたとなっています。

なお、ワシントン条約によって「陸奥」は廃棄されていますが、なぜか米軍の40cm砲戦艦の数は史実のままです。

さて、この「陸奥」はさすがに「赤城」や「加賀」の後に改装されたとあって、艦橋と煙突が一体となっているなど先進性のある空母となっています。また、バルジの装着により大幅な速力増加を達

成しています。

その反面民間での軍艦建造のノウハウ不足も書かれています。それが装甲板の製造法です。民間造船所である海南には、装甲板を造る技術がありませんでした。そのため、なんと海南造船所は複合和紙装甲なる物を開発した事になっています。

この装甲は2枚の鉄板で和紙を挟み、それを重ねて使用するとしています。これによって被弾してもそのたわみ成分で被害を抑えられるという設定になっています。

もちろん創作上の物なので、実際使える物であるかは未知数です。作中では一応魚雷の爆圧に対しては有効とはなっていますが、はっきり言ってもそもそ可燃性のものを軍艦内のいたところに組み込むということ自体、軍艦設計のセオリーを無視している物です。

また、速力の増速も重量軽減やバルジを装着したとは言え、元の速力が25ノットだったと考えると、ここまで可能だったのか疑問の余地があります。

私見としましては、「陸奥」単体だけでは小説の魅力は半減した物となるでしょう。登場人物に加えて、その特徴ある艦載機との組み合わせでこそおもしろくなります。

また先にも書きましたが、2巻目以降は完全なスチャラカ戦記ですから、硬派のストーリーを楽しむなら1巻のみです。ただ、この海軍とは違う独自の艦隊が戦うというストーリーは非常に面白いと思います。

帝国海軍実験空母「陸奥」（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

帝国海軍航空母艦「翠鶴」

帝国海軍航空母艦「翠鶴」

全長271m 排水量43400t 速力34ノット

武装21cm砲連装4基8門

12.7cm高角砲12門

機銃

対空噴進砲

搭載機90機

同型艦なし

（データは一部を除き米空母「レキシントン」時代の物。）

この艦は橋本純先生の第七航空艦隊戦記に登場した艦です。補足を見れば分かるように、この艦は米空母「レキシントン」を日本側が拿捕して使っているという設定になっています。

この小説では、日本は開戦後直ぐにハワイ占領作戦を展開し、ハワイ諸島を占領下に置いていきます。この際、米太平洋艦隊は真珠湾からの脱出を図りますが、日本の特殊潜航艇によって戦艦2隻が湾口に座礁、封鎖してしまい、その後出港不能になった艦艇は全て日本側に拿捕されてしまいました。そしてこの中にレキシントンも含まれており、日本海軍空母「翠鶴」となったわけです。

この「翠鶴」を旗艦とし、ほとんど拿捕艦艇で編成されているのが、木村昌福中将率いる第七航空艦隊というわけです。

将兵の練度は最低レベルで、連合艦隊内で通称味噌つかすと呼ばれる彼らが、太平洋やインド洋で暴れ回ると言うのがこのシリーズでしたが、4巻で打切りとなってしまいました。作者自身は6巻シリーズであり、別会社での再開を示唆していますが、本人が病氣療養中のため未だ出てはいません。

なお、作中で詳細な性能は書かれていませんが、艦体に巨大な日の丸を描いている事、21cm砲を12、7cm高角砲に切り替え、また試作段階の噴進砲を積んでいるということが登場人物の台詞からわかります。

私見ですが、艦自体は「レキシントン」ですから特別な要素は特にありません、むしろ注目すべきは艦隊を構成する戦艦群や「翠鶴」自身の艦載機であります。これらについてはまた別の機会に紹介して行きたいと思っています。

話のストーリーとしては、独立の部隊が活躍すると言う点で羅門先生の独立愚連艦隊や林譲治先生の興国の楯に近い物があり、私が大好きなシリーズの一つです。

帝国海軍航空母艦「翠鶴」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

銀河鉄道001「ビッグワン」

銀河鉄道001 SDFシリウス小隊専用警邏車両「ビッグワン」

全長 全幅 自重

速力3300skm/h

武装コスモマトリクス砲1門

砲塔車両1両

機銃装備車両2両

戦闘機2-5機

今回は列車を取り上げて見ました。

この車両は松本零士先生のアニメ銀河鉄道物語の主役とも言われる車両です。銀河鉄道には001から1000の車両番号の車両が存在し、そのトップナンバーがこの「ビッグワン」です。

SDFというのはspace defence force 空間鉄道警備隊の略称で、銀河鉄道の持つ警察組織の事です。その任務は救助から要人警護、場合によっては宇宙海賊討伐や紛争地帯での活動も行います。

「ビッグワン」はその精鋭シリウス小隊専用車両で、機関車はかつてのアメリカ大陸横断鉄道の大形蒸気機関車をモデルにしている。客車は日本の旧型客車に似ています。もちろん、かの999号と同じく、外観と中身は大違いです。

まず主兵装の砲塔車両。3もしくは4両目に連結されているこの車両には上左右3基の3連装コスモキャノンが取り付けられていて、宇宙戦艦との砲撃戦も行えます。零式対艦炸裂弾や対戦闘機用の三式空間榴散弾を扱えばさらに強力な敵とも戦えます。また2両の客車は側面の屋根が開き、コスモバルカンを掃射できるようになっています。これは近接戦闘用の機銃です。

加えて機関車自身も先頭部に惑星間戦争にも対応できるコスモマトリクス砲を装備しています。そして、その発射シーンは波動砲を思わせるものがあります。

さらに、驚くべきは格納庫車両で、屋根が開くとカタパルトと戦闘機が出てくるのです。スペースイーグル、もしくはコスモセイバーと言った機種が主な搭載機です。他にも地上搜索用のオフローダーなども装備しています。

私見としては、車両の縮尺が時々おかしいとかはありますが、列車が戦闘するというのも中々面白いものです。自分の好きなアニメのひとつです。

銀河鉄道001「ビッグワン」(後書き)

御意見・御感想おまちしています。

U結社潜水艦U型

U結社潜水艦U型

全長 排水量

速力30ノット

武装53.3cm魚雷発射管10門

ロケット砲1門

マウスキッド1基

最大潜航深度300m

同型艦50隻以上

(空白はデータなし)

第一回目紹介の707の敵役として登場した潜水艦。

世界統一を目論む旧ドイツ海軍軍人、ウルフ率いる謎のU結社が独自に開発、量産した潜水艦です。実に50隻以上の同型艦が確認できます。ただし707の真の敵役は、敵司令官ウルフ座乗のUXともいえ、どちらかというところのU型はやられ役というイメージがあります。

巻末説明では、707を遙かに凌駕する性能と書かれています。が、改装前の707にさえ2隻が撃沈されています。しかも竣工早々に。さらに海上自衛隊の水上艦や航空部隊による攻撃でも多大な損害を出し、ウルフ司令もその損耗率の高さに頭を抱える描写があります。

このU型で特徴的なのは二つの特殊兵器を持つことです。

1つ目はマウスキッドと呼ばれるロケット兵器で、これは甲板下に埋め込まれたバズーカ砲のようなランチャーから直情に打ち上げられる物で、航空機や真上に來た駆逐艦や潜水艦を叩くには非常に有効です。

2つ目はマグネリードです。これはソナーブラインド（チャフ）でソナーが使えなくなった時に使う物で、先端が強力な電磁石となっており、敵を発見したら吸い付き、発射した潜水艦はそれを辿って攻撃するというものです。

この2つの兵器によって日本のSS709潜水艦が撃沈されています。

また、艦橋後方にはロケット砲が1門設置されており、水上砲戦も可能となっています。実際にこの砲による707や708との水上砲戦が、作中で幾度か書かれています。

私見としましては、敵のしかもやられ役ではありますが、マウスキッドやマグネリードといった兵器は当時としては、かなり先進性があるものといえます。現に、この漫画はあの沈黙の艦隊の作者であるかわぐちかいじ先生にも影響を与えたといえます。また、自分もこの潜水艦と707との対決には、手に汗握る物がありました。

U結社潜水艦U型（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍二式双発単座艦上戦闘機21型「双戦」.

帝国海軍二式双発単座艦上戦闘機21型「双戦」

全長10,33m 全幅11,45m 自重2612kg

速力592km 航続力2480km

武装20mm機銃4基

爆装250kg

発動機栄21型 1130馬力2基

この機体は川又千秋先生原作のラバウル烈風空戦録に登場した機体です。

中島飛行機が零戦32型のエンジン、風防を流用して、長距離、局地戦闘目的として開発したとなっています。スペックを見ればわかるとおり、最高速度、武装は零戦より優れており、機体強度も米軍機（P40やF4F）の急降下についていけるほど強化されました。また長距離飛行時のパイロットへの配慮として、座席はリクライニング方式で傾けられるようになっています。ただし、防弾装備は零戦と同程度であったようです。

漫画版では、一部の機体は試験として7,7mm多装備（8挺搭載）型や大口径砲搭載型に改修されたとなっています。

11型は陸上専用でしたが、21型からは着艦フックを装備して航空母艦でも運用され、ミッドウェイおよびアリューシャン作戦に投入されました。初陣である東京爆撃を目論むドーリットル隊の邀撃では、木更津基地の6空所属機と横須賀航空隊の機体がB25全

機撃墜という輝かしい戦歴を残しました。

さらには、ガダルカナル戦の勃発と共に同部隊所有機がラバウルに派遣され、そこでもガダルカナルやポートモレスビーへの空襲で活躍することとなる。

ただし、双発であるために稼働率が零戦より劣り、さらに前線で一機でも多くの機体を要求している時に、エンジン2基を使うのは贅沢とされ、後継機ともいえる雷電や烈風の登場もあって、生産は280機という少数で終了しました。

私見としては、東京爆撃部隊邀撃やラバウルやモレスビー上空での戦闘シーンは白熱した物でありましたが、この機体の実現可能であったかは疑問符が付きます。特に対戦闘機性能が高すぎる面があります。7

ただし、実際陸軍向けではありませんでしたが川崎飛行機が同様のコンセプトのキ96を、また米軍がP38を開発している点からみて、日本海軍が全く開発できなかった、もしくはしなかったとは決して断言出来る物ではないでしょう。

また、その他の作品には見られないものである点も斬新であり、良かったと思います。

帝国海軍二式双発单座艦上戦闘機21型「双戦」・（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

通信省航空機搭載護衛船「太陽」

通信省航空機搭載護衛船「太陽」

全長 排水量 速力

武装 高角砲、機関銃 「赤星」のみ20cm連装砲1基

搭載機33機

準同型船「赤星」「平家」「源氏」

この船は林譲治先生原作で、現在も刊行中の興国の楯に登場した船です。

この小説は、戦時資源を安全に日本に持ち込む体制を作るために、船団護衛に全く興味を示さない海軍に変わって、通信省が陸軍の協力のもと、独自の船団護衛組織である独立行政通商機動艦隊を作り、その彼らが戦うという話です。「太陽」はその独立行政通商機動艦隊の中でも主力艦ともいえる船で、優秀商船を改造した軽空母となっています。

ちなみに、当初は空母と呼ぶ予定だったのが、統帥権の干犯の恐れがあるという理由で護衛船になったというエピソードが作中にあり、また同様に船名も当初は海軍風に「大鷹」とつけられる予定だったことも併せて紹介されています。

ちなみに、「赤星」はアンタレスと言う様に、後続船も星の和名

がつけられています。

性能的には見るべき点は無く、むしろその点で面白いのは準同型船の「赤星」です。

「赤星」にはなんと、空母化した重巡「伊吹」から降ろされた20cm連装砲が搭載されているという設定になっています。また、「赤星」は独逸製のエンジンを搭載しており、30ノット近い速力で航行可能ともなっています。そのため、いきなり登場した途端2隻の米駆逐艦を撃沈しています。

「太陽」の艦載機は、当初は97艦攻と零戦でしたが、その後はなんと陸軍三式戦闘機の飛燕を使用しています。この飛燕についても、いつか紹介したいと思っています。

私見としては、先程も申し上げたとおり、性能的には見るべき点はありません。ただし、その艦載機、そして通商機動艦隊自身の意表をつく活躍には、脱帽せざる得ないようなシーンがいくつもあります。今後も続刊が楽しみなシリーズです。

通信省航空機搭載護衛船「太陽」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

トルステイン公国海軍戦艦「ビフレスト」

トルステイン海軍戦艦「ビフレスト」

全長242m 排水量41200t 速力30ノット

武装40cm3連装砲4基12門

14cm3連装砲4基12門

12.7cm連装高角砲6基12門

40mm機銃16挺

20mm機銃4挺

準同型艦「ヨツンハイム」

この艦は吉岡平先生の「北海の墮天使」に登場する、架空の国家トルステイン公国の戦艦です。

作中ではトルステイン公国はスカンジナビア半島沖に浮ぶ群島国家で、鉄等の天然資源が豊富という設定で、四方が海に囲まれていることから強力な海軍を有しています。

「ビフレスト」はそんなトルステイン公国が日本に発注して作った戦艦です。どうして距離的に近い独逸やイギリス、アメリカではなく地球を半周する必要がある日本に発注したのかは語られてはいませんが、とにかく建造は横須賀海軍工廠が行い、基本設計はH中將（作中ではこう呼称されたが、おそらく有名な平賀造船中將と思われる）が行ったとされています。

この艦が建造されたのは、ちょうどワシントン条約の締結期間中のため、各国は新鋭戦艦の建造を控えており、日本は後の「大和」型戦艦の建造データを得る上で同艦を作ったともされています。現

に、艦橋や煙突は「長門」を思わせるような外見をしています。艦体や砲塔の印象、特に艦橋前部の弱冠傾斜した甲板や艦尾のカタパルト付近には「大和」に近いものがあります。

同型艦として「ヨツンハイム」が登場し、こちらは46cm連装砲4基8門に改修されさらに装甲も強化されていましたが、日本からトルステインへの回航途上に反トルステイン公国のテロ組織に拿捕され北海で海賊行為を行い、クライマックスで「ビフレスト」と砲撃戦を繰り広げます。

私見としては、「長門」と「大和」の折衷案的な外観はそれなりに愛嬌ある物と感じられます。架空の国家が日本製の戦艦で戦うという設定は他に例を見ないもので、それなりに興味深い作品です。吉岡先生はその後続刊の「凍てる波濤」やこれまた第二次大戦前を背景とした「新昭和遊撃隊」等を書かれましたが、その後はこの手の作品の発表の無いことが残念です。

帝国海軍試製96艦戦改

帝国海軍試製96艦戦改

全長7,6m	全幅11m	自重
--------	-------	----

速力495km	航続力1100km
---------	-----------

武装12,7mm機銃2基（陸軍が開発中の物を転用）

発動機「栄」10型空冷910馬力

以前も紹介した羅門祐人先生のスチャラカ架空戦記である「独立愚連艦隊」に登場した機体です。

作中の説明では母体となった96式艦上戦闘機に密会風防、引き込み脚取り付けなどの改造をほどこし、さらにエンジンと武装の大幅な強化をしたとしています。

性能は原型機に比べて速度が大幅に向上しており、武装も大幅に強化されています。また原型機同様のカミソリのような旋回性能とされています。ただし、その分操縦が難しく戦闘機隊長の弓月少尉が「零戦はトロイ」とまで言わしめるほどです。

そこまで来るともはや危ない戦闘機ではないかと勘繰ってしまいます。

加えて搭載した「栄」10型エンジンは零戦搭載エンジンのプロトタイプなので、故障が多いようです。作中ではこの「栄」10型はパーツを組み合わせでつち上げたエンジンとしています。

史実における96式艦戦は、零戦を開発した堀越技師が開発した

名戦闘機といえる機体です。この作品ではそれを愚連艦隊が零戦を予算不足で揃えられないために、零戦の開発費をちよるまかして改造し、作ったとしています。

しかしながら、ここまでの改造だともはや改と言うより全く別設計で新造した戦闘機とも思えますし、改造費もとても安い値段で収まるとは考えられません。もしかしたら、新造以上に高くつくのではと心配してしまいます。

また、密会式の風防についても元の96艦戦では不評であったために取り外されているので、つける意味があるのかはなはだ疑問です。

また小柄な機体到大馬力のエンジンを積んだ関係で、大型増槽を搭載しても航続距離は最大1100kmと、零戦の3分の1程度しかありません。

これは愚連艦隊全ての機体に共通する悩みの種で、これがゆえに愚連艦隊の航空作戦能力は大幅に制限されているとなっていました。1巻のミッドウェー攻撃では、同島から300km地点で攻撃隊を発進させています。

私見としては、実際ここまで大掛かりな改造をする意義や損得勘定が出来るかが不透明なので、実現性の低い機体だとは思いますが。

もつとも愚連艦隊では、明らかに現実性を度外視した機体や艦艇がでて来るので、一々指摘するのは酷とも言えますが。

しかし、自分自身が96艦戦大好き人間なので、好きな機体では

ありがとうございました。

帝国海軍試製96艦戦改（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍艦上戦闘機「零戦改」

帝国海軍艦上戦闘機「零戦改」（零式艦上戦闘機43型）

全長

全幅

自重

最大速度560km

航続力1920km

上昇限度10740m

武装7.7mm機関銃2挺

20mm機関銃2挺

爆装120kg

発動機「栄21」型 空冷1100馬力

この機体は壇良彦先生著作の「黎明の艦隊」に登場した零戦の1バリエーションです。カタログデータと漫画版の挿絵を見る限りでは、史実の52型そのものです。21型に比べて防弾板と防弾ガラスの採用、機上電話の改良などが行なわれています。

この作品では日本がアメリカに宣戦布告したのが昭和18年の12月と言う設定になっています。それまでの間、日米は条約によって軍縮を行なっていますが、日本はその間に各種兵器の更新や、艦艇と航空機の整備に力を入れています。この「零戦改」もその内の1つです。

なお、解説には一応43型とあります。当時の海軍の航空機に付く番号は10の桁が機体の改良番号、1桁がエンジンの換装順を指します。ですから43は4番目に設計された機体、3番目のエンジンを搭載したと言う意味になります。ですからこの作品内でも一応32型に相当する機体は存在したようです。ただし何故エンジンが3番目になっているのか謎ですが。

「零戦改」は主力戦闘機である「瞬電」戦闘機の生産が間に合わなかった軽空母、ならびに長距離攻撃機の護衛用として基地航空隊に配備されていて、緒戦においてクエゼリン沖での米空母攻撃、台湾からのフィリピンへの渡洋爆撃など、史実の零戦に負けず劣らずの活躍をしています。しかし、開戦からしばらくすると新たに登場する米海軍のF6F「ヘルキャット」戦闘機に苦戦を強いられます。そこでエンジンを「金星」1500馬力に強化し、主翼武装を12.7mm機銃に変更した「瑞電」が登場します。しかし最終的にF6Fを圧倒する事は叶わず、後継機の「瞬電」と「嵐電」に更新されていきます。

ちなみに、この小説内では海軍が「雷電」の採用を破棄して陸軍の「シヨウキ」戦闘機を「迅雷」として採用した見返りに、この「零戦改」を陸軍が「尖隼」戦闘機として採用しています。

私見としては、別段斬新とか新鮮と言える箇所はなく、むしろかなり堅実な戦闘機です。志茂田景樹先生作の「零戦大逆襲」に登場する零戦88型、100型や川又千秋先生作の「ラバウル烈風空戦録」に登場する零戦42型に比べて本当にまともかつ普通な戦闘機です。しかしながら、登場する下士官搭乗員笹井飛曹長の活躍とあって、読者を大いに楽しませてくれる機体であると私は思います。

帝国海軍艦上戦闘機「零戦改」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍戦艦「紀伊」

帝国海軍戦艦「紀伊」

全長328m	排水量120400t	速力30ノット
--------	------------	---------

武装51cm砲3連装3基9門

20cm砲3連装2基6門

12cm28連装噴進砲（ロケット砲）4基

12.7cm高角砲連装24基48門

25mm機銃144挺

乗員2600名

同型艦「尾張」

この戦艦は子竜蚩先生の処女作である「不沈戦艦紀伊」に登場する艦です。大和型を2回りほど大きくした艦体に、これまた2回り大きな51cmという大口径砲を搭載した戦艦です。ただし、この艦自体は別に大きすぎるとか、51cm砲の製造が無理などの問題で実現不可能な艦ではありません。現に史実の旧海軍の造艦計画の中にも、この艦に匹敵する超大和級の建造計画が構想止まりでありましたが存在しましたし、また「大和」級とほぼ同艦体に50cm連装砲3基6門を搭載する改「大和」級の建造計画も同様にありました。また砲についても、ドイツ軍が80cm砲を実用化したように、決して夢物語ではありません。

この艦を造るに当たったの問題点は、巨大な艦体を造れる造船所と「大和」級を越える膨大な予算の獲得です。小説内ではその問題を旅順に造船所を造り、「大和」級戦艦3、4番艦と「雲龍」級空母の建造中止による予算捻出でクリアしています。もともと、批判本では造船所自体の建設に費用が掛かるので非現実的としています。

出来る、出来ないの問題は別として、作者はこの艦をタイトルどおりあらゆる角度から不沈艦足りえるようにしています。例えば艦体の外壁に防水材とクッション材としてスポンジとゴムを注入したり、キングストン弁や舷窓の全廃をしたりしています。戦力としても、最強の主砲と装甲、「大和」型にはなかった大規模な対空戦闘火力を設ける事で、作中では幾多の戦闘を勝利へと導いています。

私見としましては、とりあえずこの手の艦艇を建造して実際に活躍できたのかは未知数です。作中では昭和19年の中ごろにこの艦は竣工していますが、その頃には日本の敗色は濃く、たとえ作中のようにレイテ沖海戦で6隻の旧式戦艦を沈めたところでどこまで戦局に寄与できたかは不透明です。またそれ以前に竣工していたとしても、戦艦保全に走った連合艦隊が有効に活用できたか疑問符がつきます。むしろ自分としては、旅順に造船所と大規模な基地施設を作り、さらに硫黄島での戦闘を囫にして、50隻にも及ぶ戦略物資を満載した貨物船とタンカーを日本に送り届けた事のほうが大きかったように感じられます。

ちなみに、この手の巨大戦艦は最近の架空戦記ではほとんど登場しません。（一応吉岡平先生の「凍てる波濤」の「筑後」級のように全くないわけではない）むしろ巨大戦艦の建造を中止したり、空母護衛用の高速戦艦を出したりするケースの方が多いように思えます。これが何を意味するのはわかりませんが、もしかしたら巨大

戦艦はやはり扱いにくい武器に過ぎないと言つ事を、表しているの
かもしれません。

帝国海軍零式艦上戦闘機42乙型

帝国海軍零式艦上戦闘機42乙型

全長9.1m 全幅11m 自重1876kg

速度565km 航続力1920km

武装7.7mm機銃8基

発動機「栄」21型空冷1130馬力

この機体は川又千秋先生作の「ラバウル烈風空戦録」の外伝に登場する零戦のバリエーションです。基本的な性能は52型と同じとされていますが、こちらの型のほうが若干旋回性能が勝ると説明されています。

この機体の特徴はなんと言っても、7.7mm機銃を集中的に8挺も搭載する多銃搭載主義を採用している事です。この方式は日本では全く採られず、主に米英で採用されました。

作中のテストパイロットの言葉によれば、この7.7mm機銃8挺から発射される銃弾の重量や弾丸の数は充分米戦闘機を撃墜するに足りる物であり、実際作中でも硫黄島上空の空中戦でF6F「ヘルキャット」戦闘機をいとも簡単に撃墜しています。

さて、この戦闘機に関して問題を挙げるならばそれは武装が本当

に有効なのかという事です。確かに発射速度が速い7.7mm機銃を多数載せれば、命中率は飛躍的に上昇するでしょう。しかし、防弾がしっかり完備されている米戦闘機に対してどこまで有効なのかという疑問も残ります。実際史実の零戦は、末期には威力不足の7.7mm機銃を降ろして、13mm機銃を搭載しています。作中でもベテランパイロットが、いくら豆鉄砲を積んでも意味がないと技師に噛み付いています。

一方で、7.7mm機銃弾といえども例えば相手が水冷戦闘機ならラジエーターを撃破するだけなら充分な威力を発揮しますし、空冷戦闘機でもエンジンへの集中的な被弾や、エルロンへの被弾は致命傷となります。

結論から言えば、この戦闘機が使えるかどうかは未知数です。小口径の弾を雨のように浴びせれば敵機を撃墜する事が出来るかもしれないし、逆にいくら叩き込んでも撃墜できないかもしれません。正直判断は出せません。

ただ言えるのは、爆撃機相手には使ってはいけないということでしょう。

私見ですが、作品内で語られる42に込められた意味が好きでした。42はそのまま読むとシニ、つまり死を意味する番号となります。それに加えて乙は墜ちるを意味することになります。日本海軍では、縁起の悪い番号などは嫌っていたので、それに照らし合わせれば縁起の悪い事この上ない機体です。しかし、パイロットたちは死に墜ちるのは敵と言う想いを込めて戦うよう指導されました。その部分が私の好きな部分でした。

帝国海軍零式艦上戦闘機42乙型（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍巡洋戦艦「浅間」

帝国海軍巡洋戦艦「浅間」

全長229.8 m

排水量31850 t

速力31ノット

武装28 cm 3連装砲3基9門

15 cm 連装砲4基8門

10 cm 連装高角砲7基14門

20 mm 機銃42挺

同型艦「阿蘇」、「吾妻」、「天城」

この艦は横山信義先生の巡洋戦艦「浅間」シリーズの主人公とも言える艦です。スペックを見ればわかりますが、日本製の軍艦ではなくドイツ製の「シャルンホルスト」級巡洋戦艦です。だから挿絵にも艦首に菊の御紋章を取り付けた、ドイツ独特の無骨な軍艦が描かれています。

このシリーズの世界は、ソ連によるロシア革命が失敗したためロシア帝国が存続し、ドイツはナチス党が躍進せず共和制のまま維持し、そしてアメリカはかの大西洋横断飛行を成し遂げたリンドバークが大統領として治めている設定になっています。

アメリカではリンドバーク大統領の就任直後から、彼とその側近としてアメリカに亡命したナチス党の残党たちによって、対外強硬政策と白人優越主義、ユダヤ人排斥主義的な政策を断行しています。そのため諸外国との摩擦が日々大きくなっていました。

日本は、英独仏露などとタッグを組み、日々侵略国としての色合いを強めるアメリカに対抗します。そんな中で前大戦の潜水艦中心主義路線で再軍備を行うドイツ海軍が持て余した「シャルンホルスト」級巡洋戦艦4隻を購入します。これが「浅間」級です。

史実の日本海軍では、30cm砲9門を搭載する超甲巡という巡洋戦艦を計画しましたが、最終的に建造は中止されました。「浅間」級はスペック的にはその超甲巡と同じです。ついでに言うならば米海軍が建造した「アラスカ」級もほぼ同じスペックです。

「浅間」級はドイツ製のワグナー缶搭載艦であつたために、購入当初は機関トラブルに悩まされたことが作中で触られています。これは史実でも日本海軍がドイツ商船より改造した空母「神鷹」で起きたことです。そのため「神鷹」は最終的に缶を全部取り替えることとなり、竣工がだいぶ遅れてしまいました。そして大した活躍もしないまま沈められました。

しかしこのシリーズの「浅間」級では、ドイツから積極的に技師の招聘や技術導入を行ったために、対米戦開始までにそれらは全て解決したことになります。

対米戦争が始まると、「浅間」級の姉妹たちは、太平洋を所狭しと走り回り戦います。特にその高速を生かして空母の護衛艦として働いたり、敵巡洋艦隊と戦ったりと大活躍します。そして最終的には大西洋、ニューヨーク沖にまで進出し、ナチスの亡霊と一騎打ちを行っております。

活躍の自身自体は、読者の皆様自身の目で確かめていただけると良いでしょう。

なお、このシリーズで「浅間」級は史実の日本海軍艦艇と同じく、対空兵装の強化を行い、対空ロケット砲や、大口径の機関砲の搭載を行っています。

帝国海軍巡洋戦艦「浅間」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

日本社会主義人民共和国海軍3式艦上戦闘機「疾風改」

日本社会主義人民共和国海軍3式艦上戦闘機「疾風改」

全長9,85m 全幅11,4m 自重2720kg

速力620km 航続力1700km

武装12,7mm機銃2基

20mm機銃2基

発動機「ハ-4521」 空冷2000馬力

この機体は羅門祐人先生が書いた実業之日本社刊の2部作である「流浪の連合艦隊」シリーズの「蒼茫の海」、ならびに「群青の航跡」に登場した機体です。

このシリーズでは、日米開戦が昭和天皇の決断によって回避され、日本はアメリカとの協定の下で大幅な軍縮を余儀なくされます。しかしながら、それに対して陸軍が猛反発、ソ連の後ろ盾を得て革命を起こします。これによって日本本土はソ連の傀儡政権と言つべき日本社会主義人民共和国政府（以後共和日本）が統治することとなり、天皇はハワイに亡命します。また海軍の半分も帝国側に帰順します。

そして昭和18年12月8日、共和日本政府はアメリカ合衆国に宣戦布告。亡命帝国日本はアメリカ側として共和日本政府に宣戦布告し、日本は2つにわかれての内戦に突入します。

この「疾風改」は、半減した連合艦隊が戦力再編中に開発した機

体で、名前の通り本来陸軍4式戦闘機となるべき「疾風」を艦上戦闘機として改修したものです。そして性能はスペックの通り優秀で、模擬空戦では零戦が2機1組で戦ってようやく勝てるという結果になっています。

「疾風」を艦上戦闘機に改修して使用するという話は、羅門先生の「紅の翼」や菅谷みつる先生の「灼熱の艦隊」など、他の架空戦記でもいくつか見られます。

「疾風改」はその性能の良さからソ連海軍、中国共産党軍、満州人民共和国軍でも採用され、ベストセラー戦闘機となります。その分、戦う日米軍側の大きな脅威となります。特に作中でも真珠湾空襲や小笠原沖海戦で艦爆の「赤星」、艦攻の「赤山」とともに大活躍しています。

作者の私見についてですが、まずエンジンがハ45-21（恐らくハ45-21？）と記されていることから、史実の「誉」エンジンを採用していることがわかります。しかしながら、社会主義国になったからといって日本の工業力が極端に上がるとは思えず、作中で書かれていませんが、もしかしたらエンジンの故障が頻発したかもしれません。

ちなみに史実では、満州飛行機で機体はそのままに、1500馬力の「金星」エンジンを搭載機として完成したキ116が、若干の性能低下のみで済んだことから、むしろ社会主義国の上意下達型社会の特徴を生かしてそうした方が良かったかもしれません。

なおこの作品ではいくつか疑問に思える点があります。例えば共和日本の国籍マークが当初は日の丸に小さな黄色の星だったのが、途中から赤地に白の星に変わっています。

また、この「疾風改」戦闘機も第1巻と第2巻の巻末ではまったくスペックが変わっています。

冒頭に載せたのは第2巻のスペックです。第1巻に載っていたスペックは以下の通りです。

全長 9 , 7 m 全幅 1 1 , 2 m 自重 2 8 5 0 k g

速力 5 9 8 k m 航続力 2 5 0 0 k m

武装 1 2 , 7 m m 機銃 2 基

2 0 m m 機銃 2 基

発動機 「ハ ー 4 5 2 1」

日本社会主義人民共和国海軍3式艦上戦闘機「疾風改」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国陸軍2式・3式中戦車（前書き）

今回は初めての戦車となります。

帝国陸軍2式・3式中戦車

帝国陸軍2式・3式中戦車

2式中戦車性能スペック

全長

全幅

自重23t

速力35km

航続力

武装24口径75mm砲1基

発動機V型12気筒空冷ディーゼル 240馬力

装甲厚

3式中戦車スペック

全長

全幅

自重24t

速力32km

航続力

武装48口径75mm砲1基

発動機V型12気筒空冷ディーゼル 240馬力

装甲厚

（空欄は作中内での具体的な記述なし）

この2種類の戦車は、いずれも横山信義先生の書いた学研刊の「鋼鉄のメロス」に登場した戦車です。

「鋼鉄のメロス」は、横山先生初の長編作品である「八八艦隊物語」の外伝にあたる話で、満州におけるソ連軍の侵攻と、それに立ち向かう日本戦車隊の活躍を書いています。

この小説の世界では、日本が八八艦隊を完成させ、世界の軍艦建造主義は20世紀の終わり近くまで大艦巨砲主義のまま続いています。そして陸軍の軍備も大きく違い、国産の貧弱な戦車の量産をやめ、代わりにドイツ製戦車のライセンス生産を図っています。今回取りあげた2種類の戦車も、実はドイツ陸軍の4号戦車のライセンス生産品です。

2式中戦車は短砲身であった4号初期型戦車、また3号戦車は長砲身へと換装された4号G型戦車のコピーとなっています。ただし、ただコピーしたわけではなく、例えばエンジンはドイツ製のガソリンエンジンから、日本製のディーゼルエンジンに換装するなど、それなりの工夫をこらしています。

そして昭和20年8月9日のソ連軍満州侵攻に対しては、関東軍配備の同戦車が日本版ラングである4式突撃砲戦車や日本版ナースホルンである5式砲戦車とともに、怒涛のごとく突撃してくるソ連軍戦車軍団に痛烈な一撃を与えています。

私見ですが、まず国産戦車の生産を放棄して優秀な外国製戦車のライセンスを行うという設定は、横山先生の小説ではちらほら見ら

れる設定です。そしてそれが可能かについては、おそらく可能でしょう。ただし、日本の工業力や資源力を考えるとスペックが多少落ちる可能性も同時にありえます。

例えば、装甲版の質の低下や粗悪な代替資材を使用することによる強度、ならびに耐久性の低下です。作中でも、物資不足から成型炸薬弾用装甲が取り付けられず、また一部溶接をリベットにするなどの描写が見られます。

もつとも、そうした部分を差し引いても国産の97、1式中戦車よりはるかに強力であることに代わりはありません。

ただし、作中の説明によればあくまで満州での運用を前提にしたために、南方戦線にはほとんど送られなかったようです。ただしもう一つの番外編である「鋼鉄のガルーダ」には、沖縄戦で使われて米軍に打撃を与えている描写があります。

しかしながら、日本の工業力ではドイツやソ連、アメリカのように万単位で揃えられる可能性はほとんどなく（史実でも97式中戦車の総合計数は3000両を超えなかった）、史実どおりに圧倒的な敵戦力の前に敗れるだけでしょう。ただし、例えば終戦後に起きた占守島攻防戦の時に存在すれば、歴史を変えられたかもしれません。

帝国陸軍2式・3式中戦車（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

中華民国海軍巡防艦「海陽」

中華民国海軍巡防艦「海陽」^{ハイヤン}

全長134.2m

排水量2600t

速力(33ノット)

武装12.7cm(5インチ)連装砲3基6門

40mm4連装機関砲2基8門

20mm単装機銃6基6挺

53.3cm魚雷5連装発射管1基5門

ヘッジホッグ発射機2基

爆雷投射機

同型艦「鳳陽」^{フエンヤン}、「雷陽」^{ライヤン}

() は推定値

この艦は高貫布士先生の小説、アスキー出版から発売された「海陽出撃―青竜艦隊伝説」に登場した軍艦です。その基となったのは、帝国海軍の「秋月」型駆逐艦です。

この小説内の世界では、中国共産党との内戦によって中国本土を追い出された蒋介石が海軍の再建を図ります。しかしながら、中国の海軍は日清戦争以後とともに再建されたことがなく、艦艇こそ日本から戦時賠償艦として引き渡された艦や、連合国から譲渡された艦がありました。人材が払底していました。

そこで彼は、敗戦によって職を失っていた旧大日本帝国海軍の軍人をスカウトし、海軍の再建までの時間稼ぎをしようと考えます。そうして創設されたのが旧日本海軍将校青島少佐率いる青竜艦隊です。

彼らはまず、補給艦艇を手に入れると上海に繋がれたままとっていた艦艇の台湾への輸送を始めます。その中であつたのが、旧日本海軍の駆逐艦「満月」でした。

史実における「満月」は起工後建造中止になっている艦で実在していませんが、この小説内では終戦後に艦体のみが竣工したという設定になっています。

「満月」を無事上海から持ち出すことに成功した青島らは同艦を横須賀の工廠へと回航し、そこでアメリカ式武装設置やCICの新設、レーダーの搭載などのための改装工事を行います。

そして改装なった「満月」は正式に中華民国海軍へ編入され、名前を「海陽」と改め就役します。

「海陽」は元日本海軍軍人と、台湾人を中心にした新生中華民国海軍軍人たちとともに、中国共産党軍に支援するソ連艦隊との激闘を繰り広げます。

ちなみに、このソ連艦隊は書類上は中国共産党軍の艦隊となっており、その名も「赤竜艦隊」となっています。さらに登場する駆逐艦もドイツ海軍の未成艦を改装した架空の艦艇となっています。

さて、私見についてですが当時の蒋介石が日本軍の軍人を使って海軍を再建した可能性については、有り得たと思います。なぜ

なら陸軍やパイロットの要請をするために実際に呼び寄せているからです。この部隊は白団と呼ばれました。なお、最近は実際に海軍兵から構成された青団もあつたという情報もありますが、こちらは定かではありません。

それと艦についてですが、別段特に無理なところはありませんが、主砲が1基減っている所が気になりますが、これは復元力の関係から必要性が高いものと思われます。

なお準同型艦の2隻は、米英に戦時賠償艦として引き渡されたものを中華民国が買い取ったという設定で、装備もそれぞれ搭載砲と魚雷を減らした舟艇搭載の上陸支援艦と機雷敷艦として改装されています。

中華民國海軍巡防艦「海陽」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

ロシア連邦海軍戦艦「ヴァツアーチン」

ロシア連邦海軍戦艦「ヴァツアーチン」

全長400m

排水量21800t

速力

武装60cm3連装砲3基9門

対空機関砲

ヘリコプター

同型艦「トハチエスキー」他1艦

この戦艦は架空戦記業界の巨匠たる横山信義先生の最初の作品である「鋼鉄のリヴァイアサン」に登場した戦艦です。ちなみに「ヴァツアーチン」とは、第二次大戦中にウクライナ戦線でパルチザンの攻撃で戦死したソ連軍の将軍の名前です。

「鋼鉄のリヴァイアサン」は「八八艦隊物語」の未来を描いた作品で、太平洋戦争中にいに航空機が戦艦を沈めることが出来ず、大艦巨砲主義が1990年代に至るまで続いているという話です。

「トハチエスキー」級戦艦は当に大艦巨砲主義の権現のような存在で、「大和」級はもとより、実在する原子力空母よりも大型です。主砲の60cm砲も、列車砲に相当する大きさです。

作中では朝鮮半島において動乱が発生し、北朝鮮支援のためにロシア太平洋艦隊旗艦として出撃し、同様に韓国を支援するために出撃してきたアメリカ太平洋艦隊の戦艦「リンカーン」、「マクファーン」と交戦します。

アメリカの戦艦も全長は350m近くあり、主砲も55cm砲9門という巨大戦艦です。しかしながら、ロシア海軍への油断と電子機器がミサイル攻撃で破壊されたために、最終的に撃沈されてしまっています。

そして「ヴァツアーチン」はそのまま日本海を南下し、対馬の攻略を狙います。そこへ、九州より発進した航空自衛隊の「ファントム」とF1戦闘機による空襲が加えられます。

この世界における海上自衛隊は戦後1万t以上の戦闘艦の保有を許されなかったために、ロシア艦隊への攻撃は出来ません。そのため航空自衛隊が、ソ連海軍の保有する大型戦艦への攻撃を担ったのです。

この時のために用意された音速で飛ぶジェット機用の魚雷を抱いたF1戦闘機に対して、「ヴァツアーチン」は主砲から対空用散弾を撃ち、強力な対空砲火で対抗します。

しかしながら先の戦闘で傷ついていたために、「ヴァツアーチン」は全力を発揮することが出来ず、ついに片舷に10本以上もの魚雷を集中的に被雷してしまい、その命運が着きました。

こうして40年近くおくれたものの、この世界においても日本軍の手によって大艦巨砲主義は崩壊したのです。

さて、この戦艦の実現性というとはつきり言って未知数です。ドックはどうするのか？60cm砲など作れるのか？など疑問は多々あります。一方で科学技術の進歩の度合いから見て可能ではないかという見方も同時に出来ます。

私見としましては、確かにこの「ヴァン・アール」の存在もさることながら、この小説では人物のやりとりの方がむしろ面白いと言えます。山口多聞提督の義息である航空自衛隊司令官や、ヒステリックな米太平洋艦隊司令長官、第二次大戦以来海軍軍人として戦ってきた冷静沈着なロシア太平洋艦隊司令官など、最近の作品にはない味があります。

2008年10月現在、既に新刊で買うことは不可能で、新書版も発行年月が古いことから手に入れるのは至難の業でしょうが、今に続く横山ワールドを知る上で重要な作品であることに間違いありません。

ロシア連邦海軍戦艦「ヴァツァーチン」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国陸軍三式戦闘機「飛燕」

帝国陸軍三式戦闘機「飛燕」

全長 9 m 全幅 10 / 5 m 自重 4 460 k g

速力 640 k m 航続力 1 450 k m

武装 20 m m 機銃 2 基 爆装 500 k g

13 m m 機銃 2 基

発動機 空冷 1 700 馬力 1 基

タイトルを見て、別に架空の機体ではないと思われた人もいるでしょうが、スペックを見るとおり、史実の「飛燕」とは全く違う機体です。

この機体が登場したのは、青木基行先生作の「亜欧州大戦」内です。この小説の世界では、ヨーロッパにおける大戦でソ連がナチスドイツと早々と対決して屈服させ、それどころかフランスやイタリアまでが共産主義圏になってしまった所から物語が始まっています。

全ヨーロッパをその手中に治めたソ連がさらなる侵略を行うものと恐れた日米英は共同戦線を張り、そして日本軍はついに6隻の空母からなる第一機動部隊によるウラジオストック奇襲爆撃を敢行、ソ連太平洋艦隊を壊滅させるとともに、シベリア上陸作戦を展開します。

アジアでの日本軍による進撃と併せるように、中東でも連合軍がソ連軍やイタリア軍への攻撃を開始します。面白いのはここで亡命して自由ドイツ軍を率いるロンメル元帥が登場するのですが、彼のエルヴィンクニッペが関西弁として書かれているところです。

さて、そんな世界の日本において開発されたのが上記の「飛燕」戦闘機です。史実の「飛燕」は川崎重工で開発された液冷式の流麗な戦闘機でした。ところが、この世界の「飛燕」は挿絵を見る限り、なんとFw190です。

これはどういうことかというところ、先述したとおりこの世界ではドイツ第三帝国は早々とソ連に占領され、共産主義国になっています。しかしながら、ロンメル元帥のように祖国を共産主義者から取り返すべく海外へと亡命を行ったドイツ人たちがたくさんいました。

その中に、クルト・タンク博士もいました。

タンク博士は史実においてFw190戦闘機シリーズ、第二次大戦最強の戦闘機のひとつとして数えられるTa152戦闘機を開発し、自らもパイロットだった名技術者です。彼自らTa152に試験パイロットとして乗り込む、遭遇したP51戦闘機を振り切ったのは伝説にさえなっています。

そのタンク博士は作中において、まずイギリスへと亡命します。しかしながら、元敵国の飛行機技術者を英国が迎え入れるはずがなく、仕方がないので彼はイギリスを離れ、日本へとやってきます。そして開発したのがこの和製Fw190と言える「飛燕」戦闘機です。

残念ながらこの小説は陸戦が主で、空戦も日本ばかりではなくソ

連やイギリス、アメリカのパイロットの描写などに割かれ、この機体が大規模に空中戦をするシーンはありませんでした。

ちなみに敵側であるソ連軍では、占領したドイツで造ったMe 109戦闘機を多用しています。

私見ですが、まず設計に関しては史実で存在した機体ですから問題ありません。後は日本の工業力で造れるかですが、これも英米と交易が出来、最新の工業機械と技術が輸入可能となっているので可能と言えるでしょう。

ちなみに、同じようにFw 190戦闘機を多用する小説として、林譲治先生の「兵隊元帥欧州戦記」、「焦熱の波濤」がありますが、こちらは「烈風」という名で艦上戦闘機として使用され、ドイツからの輸入とライセンス生産となっています。

なおスペックの大部分はFw 190A型戦闘機のもです。

帝国陸軍三式戦闘機「飛燕」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

日本国海上保安隊巡視艦「しきしま」

日本国海保隊巡視艦「しきしま」

全長155m

排水量7200t

速力30ノット

武装76mm速射砲2門

20mm多銃身機関砲2基

20mmCIWS1基

アスロツク8連装発射機2基

対艦ミサイル連装発射機4基

対空ミサイル発射機5基

ヘリコプター2機

この船が登場するのは、羅門祐人先生の「青き波濤」の外伝内です。この小説では20世紀末の東京を含む関東一体が、巨大彗星「トーチタス」の直撃によるショックによって、1941年の日本と入れ替わってしまいます。

タイムスリップのようでそうではない、その後幾つかの作品で用いられる時空転移とも言うべき現象によって変わる第二次世界大戦以降の世界をシミュレートした作品です。

この世界でも日米は太平洋戦争を行っており、その最中に未来から現れた日本自衛隊とWW2当時の日本軍との間で偶発的な戦闘が発生しますが、幸いこれは短期間で集結し、新政府が樹立されます。

こうしてスタートした新日本政府は、若干の科学力と軍事力の優勢があるとはいえ、巨大な米国と戦う必要に迫られます。

そんな中で、静岡県伊豆下田港に駐屯する海上保安庁の部隊は海上保安隊と名を変え、平成時代から転移した巡視船改造の巡視艦と旧海軍の海防艦改造艦を加えて海上護衛の任務につきます。

海上保安庁の巡視船は最近になってテロ対策や九州沖での不審船事件を受けて武装を強化されていますが、それでも実際の戦争に使えるような物ではありませんし、その船体自体も商船構造を採用しているために、非常に脆弱です。

そのため、架空戦記小説では海上保安庁の巡視船はやら役に甘んじることが多々ありますが、この小説内では塗装こそ海上保安庁時代そのままに、護衛艦並に強化された武装によって、マリアナへ侵攻する米艦隊相手に奮戦します。

しかし、組織名こそ変わっても、操る人間は元海上保安官であるため、決して先制攻撃を認めず、ひたすら専守防衛に徹する姿（敵の一撃を確認すると、交戦規定クリア、戦闘可能となる）は、まさに現代日本人の思想と戦争という過酷な現実の乖離を見せ付けるものです。

私見ですが、巻末掲載のイラスト図を見る限りでは、通常の巡視船が武装強化されていても特に違和感はありません。ただし、実際にこれだけの武器を巡視船に搭載したらトップヘビーになるのではないかと考えられます。ただしそれについてはバラストの搭載や、バルジの設置で緩和できる可能性もあります。

搭載されている武装のうち機関砲やミサイルの一部は、相手が未だWW2時のレシプロ機や前時代的な重装甲艦を使っている関係上、スペックダウンされたものや、徹甲弾仕様の物が使用されています。

また海上保安庁の艦船が敵航空部隊や敵艦隊に立ち向かっていく
姿には、目頭を熱くさせられるものがあります。

なお、その他の主な巡視船改造巡視艦のスペックは以下の通り。

巡視艦「やしま」

全長130m 排水量5500t 速力28ノット

武装76mm速射砲1基

20mm多銃身機関砲1基

20mmCIWS1基

対艦ミサイル連装発射機2基

アスロツク8連装発射機1基

対空ミサイル発射機2基

ヘリ2機

巡視艦「いず」

全長100m 排水量2500t 速力35ノット

武装76mm速射砲1基

20mmCIWS1基

アスロツク8連装発射機1基

対空ミサイル発射機1基

巡視艦「しきね」

全長80m 排水量1200t 速力30ノット

武装40mm単装機関砲2基

20mmCIWS1基

アスロツク8連装発射機1基

対空ミサイル発射機1基

同型艦「するが」「かとり」「あまぎ」

巡視艦「のじま」

全長90m 排水量1100t

速力30ノット

武装20mm多銃身機関砲1基

20mmCIWS1基

アスロツク8連装発射機1基

日本国海上保安隊巡視艦「しきしま」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

南部連合国海軍戦艦「ジェイムズ・A・セドン」他

南部連合国海軍戦艦「ジェイムズ・A・セドン」

全長180m

排水量29000t

速力25ノット

武装36cm砲10門他

同型艦「アール・B・ドーン」「スターリング・プライス」「ベン・マックローチ」

「ジョンベル・フッド」「ジョナス・コーギヤス」

この戦艦は、性能的には何も見る物がありません。至って平凡な戦艦です。この艦が登場したのは、荒川圭夫先生の「デュアルパシフィックウォー」に登場した戦艦です。この小説では南北戦争の結果、アメリカは北のアメリカ合衆国と、南部の南部連合国に分裂しています。そして北は日英、南は独と同盟を結んでいます。

そして太平洋とヨーロッパで戦端が開かれますが、当然日英北米対独南米という構図となります。

戦いがスタートすると、南部連合国は各地でドイツ軍と共闘して合衆国軍や英軍を破ります。そんな中で日本は強力な海軍力をもつて奮戦します。

さて、この小説には多数の架空の艦船や航空機、戦車が登場しますがそれらの性能は比較的堅実で、やはりストーリーや登場人物の方が魅力的と言えます。また何故かはわかりませんが、海軍力が整

備されている南部に比べて、北部は戦艦の性能が低く、開戦した途端太平洋艦隊が壊滅状態に陥り、あまり良いところがありません。

ちなみに南部連合国の戦艦の命名基準はいずれも人名となっております。それに対して北部合衆国は史実どおり州の名前が命名基準となっていてます。北部はともかく、南部の戦艦数は非常に多く、よく命名仕切れたものと感心してしまうぐらいです。ちなみに、これあ作者が南北戦争研究が好きと言うのが大きな要因だそうです。

その他の南部海軍の主力戦艦は以下の通り

戦艦「リチャード・S・ユエル」

全長190m

排水量32000t

速力27ノット

武装38cm砲8門

同型艦「ブラグストン・ブラッグ」「ジョン・N・マフィット」「ラファエル・セメス」

戦艦「ジョージ・E・ピケット」

全長210m

排水量41000t

速力27ノット

武装40cm砲10門

同型艦「ピエール・G・T?ボールガード」「ジェイムズ・E・B・スチュワート」

「アンブローズ・P・ヒル」

戦艦「ジョゼフ・E・ジョンストン」

全長220m 排水量45000t 速力28ノット

武装40cm砲12門

同型艦「ジョン・C・ペンバートン」「ウィリアム・C・クアントレル」

「ジョン・S・モスビー」

戦艦「ロバート・E・リー」

全長281m 排水量61000t 速力28ノット

武装40cm砲12門

同型艦「ネイサン・B・フォレスト」「ルイス・A・アーミステッド」

「ジョン・H・モーガン」

戦艦「トマス・J・ジャクソン」

全長284m 排水量81000t 速力28ノット

武装46cm砲9門

同型艦「ステファン・R・マロリー」「ジェームズ・ロングストリート」

「フランクリン・ブキャナン」

南部連合国海軍戦艦「ジェイムズ・A・セドン」他（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

独立日本艦隊軽艦戦「雷光」

独立日本艦隊軽艦戦「雷光」

全長 7,4 m

全幅 10,2 m

自重 1020 kg

速力 450 km

航続力 1600 km

武装 12,7 mm 機銃 2 基

発動機 「南天 2 型」 空冷 796 馬力

以前にも少しばかり紹介した羅門祐人先生の「独立日本艦隊」シリーズに登場する独立日本艦隊の主力戦闘機です。

台湾銀行から融資を受けて倒産を免れた鈴木商店が造り上げたこの艦隊は、戦時こそ帝国海軍と肩を並べて戦う艦隊ですが、平時は海賊対策として一部の護衛艦を除くほとんどの艦船が貨物船やタンカーとして運用されています。

そんな艦隊の艦載機も、作中では軽飛行機という通常の軍用機よりも一回り小さい機体が使われており、この「雷光」にしても既に海軍の戦闘機が零戦であるにも拘らず元は 96 式艦戦をモデルに造られているとされています。

性能的にはパツとしませんが、私企業の軍隊が作っただけあり整備面では扱いやすいようで、機体の組み立てもボルトの接合が多用されている描写があります。

第一巻の挿絵にもこの機体が飾っているのですが、逆ガル翼に改修されて飛ぶ姿は中々格好良い物があります。なお、この 96 艦戦

を改修するというストーリーは羅門先生が以前に書いた「独立愚連艦隊」シリーズにも書かれており、性能も似通っている面があります。

そしてこの機体は初陣の珊瑚海海戦から大活躍をします。ただし、1巻でこそ艦隊に迫る米雷撃機「デバスター」を叩き落す描写がありますが、それ以後の巻ではかなり存在が薄くなります。

「独立愚連艦隊」の試製96艦戦改も2巻時点で「隼改」に置き換えられて存在が薄くなっていましたから、同様の道を歩んでしまったようです。

またこの機体には派生型が存在しています。その内の1つが水上機母艦搭載用の「波風」でスペックは以下の通りです。

軽水戦「波風」

全長7,4 m	全幅10,2 m	自重1150 kg
速力320 km	航続力2200 km	
武装12,7 mm機銃2基	爆装60 kg	
発動機「南天2型」空冷796馬力		

こちらはフロートが付いたために速力が泣けるほどに遅くなっています。これで敵機を撃墜することなど可能なのか？と疑いたくなるほどです。

ただし、燃料タンクの容量が増えたようで航続距離は600 kmも延びています。

この機体は「雷光」よりも悲惨(?)で、スペック表まで作られているにも関わらず、ほとんど作中内では直接的な描写がないまま

終わりました。

そしてもう1つの機体は「雷光改」で、呼んで字のごとく「雷光」のバージョンアップ版です。スペックは以下の通りです

軽艦戦「雷光改」

全長7,4 m	全幅10,2 m	自重1140 kg
速力538 km	航続力1400 km	
武装12,7 mm機銃2基	爆装60 kg	
発動機「栄」23型	空冷985馬力	

こちらは米軍戦闘機の馬力強化に併せてエンジンを強化したわけですが、急ごしらえのために、なんと一回りも大きい零戦のエンジンをデスチューンして搭載しています。

そのお陰で最高速度は80 km近くも上がりましたが、その代わり短期間の改良が祟って機体各部に振動が出るという描写がありません。

一応設定はちゃんとしていたのですが、やはり直接活躍する描写は少ないままに終わりました。また、登場人物が本格的な後継機に言及しているシーンもありましたが、結局そちらも登場せず終わりました。

私見ですが、設定としては中々面白い戦闘機だとは思いました。しかしながら、作品自体が艦隊全体の描写にあてられているため、活躍自体は少なくそこが残念と言えます。

また作者は海軍と一線を画すために軽飛行機を出していますが、別に軽飛行機じゃなくても普通サイズの機体でも言い逃れが出来る

のではないと思います。現に独立組織としての艦隊を描いた他の先生のシリーズでは、遠慮なく普通サイズの機体や海軍との共用機を使っています。

ただし、羅門先生らしい細かい設定の中での奇想天外な発想と割り切ってしまうえば良いのかもしれませんが。

独立日本艦隊軽艦戦「雷光」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

日本国海軍艦上戦闘機「電征」

日本国（大日本帝国）海軍艦上戦闘機「電征」

全長10,2m

全幅11,2m

自重2930kg

速力670km

航続力1670km

武装30mm機関銃2基

その他2基

発動機 不明

日本で恐らく一番有名な架空戦記である「紺碧の艦隊」に登場した戦闘機がこの「電征」です。登場したのは1942年からですが、上のスペックにあるとおり非常に優れた性能を持っています。

アニメ版と漫画版にも登場しており、2重反転プロペラと上下開閉式の風防が非常に印象的で、史実の「疾風」や「紫電改」を思わせるところがあります。

初陣では米軍機を大幅に上回る性能で、最新鋭戦闘機F7F「エンゼル・キャット」すら圧倒しています。またその後登場した米陸軍戦闘機P51に対しても優位に戦う場面があります。

アニメ版では勇壮な音楽と共に発進し、米軍機をバツバタと撃ち落していきます。ただし、一方的過ぎる傾向もありましたが。

いくら未来情報が有るからと言って、零戦からたった2年でここまで高性能な戦闘機を作り上げられるのか大いに疑問なところですが、万能戦闘機として「紺碧」世界の主力艦上戦闘機として戦って

います。

しかも、驚くべきことにこの「電征」は改良を繰り返し、最終的にターボプロップ・エンジン搭載の7型（アニメ版では「タ式電征」）まで登場しています。

その7型のスペックは以下の通り

全長11'2m	全幅11'2m	自重4960kg
速力750km	航続力1540km	
武装30mm機銃2基		
20mm機銃2基		

発動機 ターボプロップ1基

このターボプロップ搭載機は漫画版とアニメ版でデザインが大きく違い、アニメ版では逆ガル翼の機体になっており、胴体下に爆弾、主翼下にロケット弾を多数搭載してドイツ軍戦車軍団を攻撃しております。まるで「コルセア」です。

また初期型も英国空軍に無償供与されて、タ式とともにがんばっています。こちらは蛇の目を付けて塗装も英国式にしながら、ドイツ空軍相手に奮戦しました。

さて、それでは私見ですが。まずこの機体の特徴とも言える2重反転プロペラです。このプロペラを採用したことで、速力と上昇力をアップさせるという記述がありますが、実際これを採用した川西の「強風」水上戦闘機では不調が多発し、量産機では通常の3

枚プロペラに戻されています。

現代ならともかく、当時の日本の技術レベルでは高性能なプロペラは作れず、2重反転プロペラの生産は荷が重かったのでしょう。

同時に登場した電探連動対空砲とともに、いくらなんでもと思わせられる所です。

ちなみに「黎明の艦隊」シリーズに登場する「瞬電」戦闘機も2重反転プロペラを採用していましたが、ギアボックスからの油漏れが解決できなかったために、途中で4枚羽に交換するという、かなりリアルな描写がなされています。

「紺碧の艦隊」は姉妹編の「旭日の艦隊」とともに、長編アニメ化された希有の存在でしたが、その後よりリアルな架空戦記が続々と登場したため、現在は「火葬戦記」と呼ばれる傾向もあります。

しかしながら、作者としてはそれなりに好きな作品です。

日本国海軍艦上戦闘機「電征」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍航空母艦「天鳳」他

大日本帝国海軍航空母艦「天鳳」（麗鳳）

全長267m

排水量27100t

速力33ノット

武装5インチ両用砲12門

40mm機関砲68挺

20mm機関砲52挺

搭載機100機

同型艦「海鳳」

この艦は以前御紹介した羅門祐人先生の「蒼茫の海・流浪の連合艦隊」シリーズに登場する航空母艦です。スペックを見てピンと来る方もいるかもしれませんが、実はこの艦アメリカ海軍の「エセックス」級航空母艦です。

この作品では、日本本土に社会主義革命によりソ連の傀儡政権とも言つべき日本社会主義人民共和国が打建てられ、天皇をはじめとする大日本帝国は止む無くハワイに亡命します。

一方日本海軍では史実における太平洋戦争開戦を避ける代償として、連合艦隊の半分を国際連盟下の国際合同艦隊に提供すべく、戦艦「大和」をはじめとする艦隊がハワイに向かいました。しかしその間に社会主義革命が勃発したため、艦隊は亡命大日本帝国艦隊として再編成されます。

その後日本本土やその植民地から脱出した海軍軍人を含めて連合艦隊は運用されますが、日本本土に置いてきた艦隊はそっくりその

まま共和日本海軍に編入されたため、帝国海軍は戦力不足に陥ります。

そこでアメリカから無償供与（実際は戦後払い）名目で艦艇が提供されます。それがこの「天鳳」級です。なお、その後共和日本が「大鳳」級空母に同名をつけたことが判明し、途中で「麗鳳」に改名されています。

ちなみに提供された艦艇はこれだけではありません。他に「サウス・ダコタ」級戦艦2隻、「カサブランカ」級護衛空母4隻、「クリブランド」級軽巡2隻、多数の「フレッチャー」級、「ベンソン」級駆逐艦が供与されています。

なお不思議なことに、潜水艦はただの1隻も供与されていません。

提供された艦艇の内戦艦は「信濃」、「尾張」に、護衛空母は「海準」、「蒼準」、「飛準」、「紅準」に、軽巡は「小笠原」、「硫黄島」にそれぞれ改名されています。駆逐艦に関しては作中に具体的な記述はありません。

なおこれら艦艇のスペックは以下の通り。

帝国海軍戦艦「信濃」

全長207m

排水量38000t

速力28ノット

武装40cm砲9門

5インチ両用砲16門

40mm機関砲40挺

20mm機銃40挺

水偵3機

同型艦「尾張」

帝国海軍航空母艦「海準」

全長156 m 排水量7800 t

速力19ノット

武装5インチ高角砲1門

40 mm機関砲16挺

20 mm機関銃

搭載機29機

同型艦「蒼準」「飛準」「紅準」

帝国海軍軽巡洋艦「硫黄島」

全長186 m 排水量13775 t

速力33ノット

武装15.2 cm砲12門

5インチ両用砲12門

40 mm機関砲28挺

20 mm機銃21挺

水偵4機

同型艦「小笠原」

上記した艦の内、「尾張」は共和日本海軍の雷撃により撃沈されますが、何故か次の巻では復活しています。羅門作品では沈んだ艦艇が時折復活するという珍現象が見られます。

私見としては、これら艦艇は実在する艦艇ばかりなので特に言うべきところはありません。途中で書いた潜水艦の供与が全く為されていないところだけが疑問を呈する点と言えますでしょう。

それと電波兵器の技術では本来優れ、兵装面でも総合的に優れている筈の日米連合艦隊が、何故かこの作品では日ソ艦隊に負け続けるのが不思議なところです。

帝国海軍航空母艦「天鳳」他（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍楔艇

帝国海軍楔艇「佐多」

全長35m

排水量512t

速力36ノット

武装20cm砲3連装1基3門

53cm魚雷発射管2基

25mm3連装機銃2基6挺

爆雷6個

同型艦「大瀬」「室戸」「松帆」「禄剛」「犬吠」「塩屋」「日御」
「竜飛」「神威」「襟裳」「足摺」

今回紹介する艦艇は、これまで紹介してきた艦艇や航空機の中でも以前紹介した「愚連艦隊」シリーズの高速打撃艦並みに毛色の違う艦艇です。まず楔艇という艦種自体がオリジナルです。

この楔艇は「不沈戦艦紀伊」シリーズ、不沈要塞「播磨」シリーズと言った巨大軍艦が活躍するシリーズを書いてきた子竜蛸先生作の「暁の鎮魂歌」シリーズに登場します。それまでの巨艦とは正反對の超小型軍艦です。

世界最大最強の戦艦「大和」の起工にこぎつけた日本海軍であったものの、どうも不安を払拭できない伏見宮元帥が平賀造船中將にその想いを伝えたところ、「だったら逆を行って幾ら沈んでも用意に量産できる強力な艦艇」というコンセプトを提案され、その結果

具現化したのがこの楔艇です。

魚雷艇の様に俊敏に動き、その機動性能を持って敵の懐深く進入して重巡並みの20cm砲を打ち込んで撃破する。また副兵装として魚雷発射管も搭載しています。

作中では数が揃うまでに時間を要したために格好の出番とも言えたガダルカナル戦にはついに間に合わず、昭和19年中頃からまず台湾を拠点にしての敵潜水艦狩りを行います。

その結果実に30隻以上もの米潜水艦をバシー海峡近海で葬り去っています。ただし、その効果はほとんどないという描写が作中に書かれています。

そして帝国海軍最後の決戦であるレイテ沖海戦に西村艦隊随伴として参加し、敵魚雷艇や水雷戦隊を打ち払い、最後は西村艦隊をオランダンドルフ少将率いる旧式戦艦部隊との決戦にまで導きます。

さて私見ですが、子竜作品らしく建造までの過程や戦闘シーンについてはそれなりに上手く仕上がっています。しかしながらかなり無理を押し通していると見られる箇所も多々あります。

まず楔艇については、確かに使えばそれなりでしょうが果たしてあのような小型船体に20cm砲を積んで大丈夫かという疑問がまず出ます。仮に使えたとしても、今度は砲弾の搭載量や航続力に大きな影響を与えるはずです。

また対潜戦闘の場面でも、有効に音響機器が使える船体であるのか大いに疑問です。さらに潜水艦を30隻も沈めながら効果があまりないというのも、戦時中の通商破壊戦の実態に対して少しばかり

無知ではないかと考えてしまいます。

さらに当時の日本海軍では小型高速艇の研究が進んでおらず、実でも魚雷艇の開発に失敗しています。そう考えるとさらに実現性が薄くなります。

子竜先生は最近になって現代物にもタッチしているようですが、どうも歴史認識の部分で極端と思える場所があるので、無茶な設定とともに自分としては敬遠しがちです。しかしながら上記したように戦闘シーンや設計・建造シーン等はかなり上手いので、今後とも活躍を期待するところです。

ちなみにこの楔艇には小型であることから、捕鯨母船改造の母船が付けられています。船体内には楔艇を納め、上甲板からは対潜哨戒用のセスナ機を発艦できるようにするなど、陸軍の強襲上陸艦「あきつ丸」に似ています。

帝国海軍楔艇母艦「来光」（分類上は航空母艦）

全長152m

排水量6880t

速力25ノット

武装10cm高角砲8門

25mm機銃24挺

帝国海軍楔艇（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍装甲巡洋艦「畝傍」

帝国海軍装甲巡洋艦「畝傍」

全長 排水量 11500 t

速力 22ノット

武装 20 3 c m 砲 2 門

15 2 c m 砲 4 門

13 m 機銃 8 挺

水偵 3 機

同型艦「耳成」

この艦が登場したのは、現在主にライトノベルで活躍中の鷹見一幸先生唯一の架空戦記「大日本帝国第七艦隊」です。

この作品はそれまでの架空戦記にはない斬新な内容で、まず試運転中の戦艦「大和」がアメリカ潜水艦に撃沈され、それによって海軍は「信濃」を「大和」にでっち上げ、3番艦の予算を架空の艦隊の創設費とすることで議会や内閣を騙します。

結果生まれたのが第7艦隊です。第7艦隊はあくまで予算獲得のダミーに過ぎませんから、旧式艦の寄せ集めとなります。

旗艦である「畝傍」は日露戦争で活躍した元装甲巡洋艦「浅間」級で、擬装の意味から改名されます。また竣工から40年近い老兵であるため、改装や武器の交換が為されています。

本来ならこの第7艦隊は船団護衛などの脇役のみに徹するはずでした。ところが米国と開戦した直後に起きたマーシャル沖海戦で、連合艦隊主力が米太平洋艦隊主力と相打ちしてほぼ全滅したことから、戦争の表舞台へと現れます。

第七艦隊は改装空母の「氷川丸」級や、実験用高速潜水艦を改装した「電光艇」、さらに倉庫から引っぱり出した13式艦攻や95式陸攻、96式2号艦戦を駆使して、戦力を補充して再進撃を図る米太平洋艦隊に、ウエーク島沖で挑みます。

本来なら実験段階でお役御免となった兵器や、太平洋戦争時はあまりに古すぎて使えなかった兵器を米太平洋艦隊にぶつけるという非常に斬新な内容で、また登場人物もユニークでそれなりに面白い作品でしたが、この作品以後鷹見先生は架空戦記を一切書いておらず、残念な感があります。

さて「敵傍」に関する考察ですが、まず実現性については非常に高いと言えます。史実でも太平洋戦争中に外洋で働いた白露戦争時の艦艇は幾つかありますので。例えば工作艦として戦没した戦艦「朝日」や、終戦近くまで機雷敷設に邁進した装甲巡洋艦「常磐」がこれにあたります。ただし、敵の最新鋭艦に正面切って戦うと言うのは、とてもお勧め出来ませんが。

また第七艦隊を構成するその他の艦艇、中国海軍より拿捕した巡洋艦を改装した「明日香」、「佐保」、除籍した二等駆逐艦「樫」級のボイラーを半分にした「双月」級、さらに先ほど紹介した「電光艇」の元となった実験潜水艦なども、史実では存在した艦艇ばかりなので、特に無理のある設定ではありません。

ただし航空母艦「氷川丸」級については、速力と全長の点から航空機の運用が本来難しいはずで、かなり無理のある設定と言わざるを得ません。（ただし、旧式の複葉機のための運用であるならそうとも言い切れない。） また登場する航空機の多くも、本来は耐用年数を超過している機体ばかりで、この点もかなり無理な設定と言えます。

しかしながら、架空戦記での面白い所といえる史実では陽が当たらなかった艦艇や航空機に注目し、活躍させる点については評価しても良いでしょう。

鷹見先生がこの作品のみで架空戦記から離れてしまったことが、重ね重ね残念です。

帝国海軍装甲巡洋艦「畝傍」(後書き)

御意見・御感想おまちしています。

帝国陸軍百式大型特務戦車「オト」

帝国陸軍百式大型特務戦車「オト」

全長 8 m 全幅 3 m 自重 3.8 t

速力 40 km 航続力

武装 57 mm 砲 1 門

装甲厚 25 mm ～ 35 mm

発動機「瑞光」空冷ガソリンエンジン

この戦車は、ラノベ風架空戦記作家として知られる吉田親司先生が書いた学研発行の「異形空母那由多」に登場する戦車です。スペックを見る限り特に特筆するべき点はありません。

しかしながら、この戦車にはスペックにはない大きな秘密が隠されています。それは砲塔上に飛行甲板となる鉄板を載せており、複数台で連結すれば空母のような飛行甲板に成るというそれまでの架空戦記にはない兵器です。

架空戦記に登場するトンデモ兵器は大概実際に計画されたもののか、逆にあまりにもぶっ飛んでいる物が多い中で、これはかなり異色です。（例えば氷山空母なるものは作者が知っているだけで3作品に登場しています。）

なんでこんな車両を日本が作ったかについては、作中の設定が深く関わっています。この作品の世界では、1923年にツングースカで空中爆発した隕石がなんとモスクワを直撃、そこから半径数百キロにわたり巨大なクレーターを作り、そこへ北極海から海水が流れ込んで新たな海が出来ます。

この後ロシア政府（ソ連政府）消滅により、ロシアは西をドイツ中心のヨーロッパが、東を日本が事実上その勢力圏に置き、両軍は新たな海（第八海）を挟んでにらみ合います。

こうした設定（ほとんど異世界に近い世界）を考える点は、ライトノベルという領域を書いている吉田先生ならではの言えましよう。

その第8海周辺には協定によって飛行場を作ることが出来ません。また第8海に入れる艦艇も大幅な制限を受けています。

そこで欧州軍は現地で空母を建造し、航空戦力を運用します。それに対して日本軍は第8海の造船所で戦艦「武蔵」を建造しつつ、飛行場の代わりとして戦車を使った陸上空母成る兵器を運用します。

そしてついに日欧軍の間に紛争が勃発し、両軍は戦闘状態に入ります。ドイツ軍とフランス軍はそれぞれが派遣した戦艦と現地建造の空母で日本軍を叩こうとします。しかしながら日本軍も陸上空母と戦艦「武蔵」で反撃に出ます。

最終的に戦闘は日本の勝利で終わり、その後起きるであろう日本と欧州軍との本格戦争を臭わせるところで作品は終わりますが、続きは残念ながら発刊されていません。

私見としては、非常に斬新な設定でありつつも、吉田先生独特のどこか説得力ある文体で書かれているので、全体的な内容やキャラクターなどと併せて面白い作品です。

その一方で、こんな戦車の上に載せた程度の飛行甲板の幅で航空機を運用できるのか大いに気になります。作中でも運用制限の話が幾度か出てきます。連結作業や分離作業も複雑そうであり、運用できる場所も制限されます。

また戦車自体が非常に脆弱で、やはり作中で行われた戦車戦でいとも簡単に撃破されています。

しかしながらそのアイデア自体は非常に斬新であり、なおかつよく作りこまれている点は非常に評価して良いでしょう。そしておそらく今後登場しない率が高い兵器だけに、貴重とも言えます。

それからこの車両は本来考えすら出来ない兵器も、様々な条件によつて作り得るということを良く示している車両とも言えましょう。

帝国陸軍百式大型特務戦車「オト」（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

このシリーズではまだ取り上げていませんでしたが、架空戦記の代表作家のひとりである中里融司先生が昨日お亡くなりになったそうです。

先生は艦魂小説の「軍艦越後の生涯」や「東の太陽西の鷲」をはじめとする多くの作品を書かれており、自分も昨年のIFCONで元気な姿をお見かけしただけにショックです。

謹んで御冥福をお祈りします。

トルステイン公国海軍駆逐艦「ノール」他（前書き）

今回も複数の艦艇を紹介します。

トルステイン公国海軍駆逐艦「ノール」他

トルステイン海軍駆逐艦「ノール」

全長118m

排水量1600t

速力34ノット

武装12.7cm砲6門

61cm魚雷発射管9門

7.7mm機銃2基

同型艦「エスト」「ジユド」「ウエスト」

この艦は以前紹介した戦艦「ビフレスト」と同じく吉岡平氏原作の「北海の墮天使」に登場する架空の国が保有している駆逐艦です。この艦も日本からの輸入艦で、原型は日本の「吹雪」型駆逐艦とされています。

北海での運用を想定して耐波性能を向上させ、さらにバルジを装備して復元性にも気を遣っています。

作中では駆逐艦ゆえか余り活躍の機会はなく、まず1隻が「ヨツンハイム」の46cm砲弾の直撃を受けて撃沈され、残る3隻も「ヨツンハイム」に魚雷攻撃を仕掛けるべく突撃中に、原子力光線の直撃によって轟沈すると言っ悲惨の最期を迎えました。

大型の戦艦ならともかく、どうして駆逐艦まで日本に発注されたのか疑問符が付きますが、当時の日本海軍駆逐艦の高評価を考えれば、あながち無茶な設定ではありません。

トルステイン海軍戦艦「フリッドスキャルフ」

全長 排水量34000t 速力26ノット

武装38cm砲8門

英国に発注された戦艦で、「クイーン・エリザベス」級戦艦の発展型という設定になっています。

「ビフレスト」に次ぐ主力艦でしたが、「ヨツンハイム」の46cm砲弾の直撃を2斉射受けて大破、転覆しています。

トルステイン海軍重巡洋艦「シグムント」

全長 排水量 速力36ノット

武装20cm砲8門他

同型艦「ジグルド」

この艦も「ノール」級と同じ作品に登場した艦です。作中の説明ではイタリアに発注された改「ザーラ」級重巡洋艦とされています。

漫画版でもイタリア巡洋艦の特徴である砲塔や艦首部の水上機用カタパルトがしっかりと描きこまれています。

戦艦に次いで艦隊主力戦力でしたが、両艦とも1発も砲弾を撃たないまま「ヨツンハイム」の46cm砲の前に撃沈されてしまいます。特に「ジグルド」は単に脅しのためだけに撃沈されており、かなり悲惨です。

トリステイン海軍軽巡洋艦「スルト」

全長 排水量6500t 速力

武装15cm砲9門

その他

この艦はトルステイン製の艦で、ドイツの「ケーニヒスベルク」級を参考にして建造されたとされています。作中では水雷戦隊旗艦として用いられています。

「ノール」級駆逐艦を率いて「ヨツンハイム」に突撃したものの、原子力光線砲の直撃を受けて轟沈し、水雷戦隊司令官サロネン大佐共々北海に沈みました。

トリステイン海軍駆逐艦「スレイプニール」

全長 排水量3000t 速力40ノット

武装12.7cm砲8門

61cm魚雷発射管8門

この艦はトルステイン製の大型駆逐艦で、日本海軍が設計を行った上自国生産された設定となっています。

あまり活躍らしい活躍はしていませんが、作戦のために煙幕を張ったりするなど地味に働いています。僚艦が次々と沈められる中、戦艦「ビフレスト」と共にただ1隻だけ生き残った強運艦です。

トルステイン公国海軍駆逐艦「ノール」他（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍航空戦艦「大和」

帝国海軍航空戦艦「大和」

全長263m

排水量64000t

速力27ノット

武装46cm砲3連装砲2基6門

15.5cm3連装砲1基3門

12.7cm連装高角砲10基20門

25mm機銃多数

搭載機40機

この艦は若き架空戦記作家内田弘樹先生の「迫撃の巨竜」に登場する航空戦艦です。自分の知っている限り、「大和」を「伊勢」、「日向」同様航空戦艦に改装する作品はこれが初めてです。

この作品内において「大和」は呉における爆発事故で3番砲塔を含む艦体後部を大破し、やむなく「伊勢」や「日向」同様航空戦艦に改装されています。しかも芸の細かいことに爆発の元となった放火を起こしたのが転属してきた元「陸奥」乗員となっています。

そのため史実のように「陸奥」は爆沈しておらず、マリアナ沖での決戦に参加します。なお、「大和」の修理と空母の増産のため「信濃」建造が取りやめとなっています。

しかしながら代わりに3隻の航空戦艦と「雲龍」級空母が竣工し

たため、さらに軽巡「酒匂」改装の軽空母によって史実より300機近くも航空機が増えています。

「大和」が搭載する艦上機も手が込んだ内容となっています。史実の「伊勢」と「日向」は「彗星」艦上爆撃機、そして「瑞雲」水上爆撃機を搭載する予定でした。残念ながらそれら航空機を台湾沖航空戦で消耗し、やむなくレイテ沖海戦では艦載機は積まず、事実上防空戦艦として働いています。

しかしながら、この作品は航空戦艦である「大和」が空母としても戦艦としても大活躍する話です。

搭載機は特殊攻撃機の「南山改」です。元となつたのは潜水艦搭載用攻撃機「晴嵐」の練習機版の機体で、史実では少数機が生産されたに留まりました。「彗星」と同系列の機体ですが、800kgまで爆装可能で雷撃も出来るという一種の多用途機である利点を生かして戦います。

この作品では潜水空母計画が中止と成り、その機体を改修の上航空戦艦搭載機にしちゃっています。「南山」を艦上機化するというアイディアは谷甲州先生の「覇者の戦塵」シリーズで既に行なわれていましたが、地味なあちらと違ってこちらは熱い戦いを繰り広げています。なんと敵艦隊の対空砲と迎撃の油断について、空母3隻を撃破しているのです。

また航空戦艦発進後は着艦が出来ないため、空母に收容されます。この時点で航空戦艦から整備兵が移っているので、反復攻撃が可能となります。

そしてこの「巨竜」シリーズは、最後には熱い砲撃によるガチン

コバトルになるのが定番です。この作品でも「大和」が「アイオワ」級と戦います。

その夜戦の最中に登場するのが「彩雲改」艦上攻撃機です。読んで字のごとく、この機体は史実の名偵察機「彩雲」を艦上攻撃機化した凄まじい機体です。

残念ながらこのシリーズは単発で終わり、航空戦艦の雄姿は続きませんでした。航空機ファン、戦艦ファンのどちらにも魅力的な作品と言えるでしょう。

私見としてましては、航空機の設定と軽巡改装空母に無理を感じるところですが、話の流れがその無理を忘れさせるほどに面白いので、気にはならないと言えます。

帝国海軍航空戦艦「大和」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国陸軍 99式双発軽爆撃機 1型乙

帝国陸軍 99式双発軽爆撃機 1型乙

全長 12.9 m 全幅 17.5 m 自重 5.9 t

速力 495 km 航続力

武装 20 mm 機銃 2 基

7.7 mm 機銃 7 基

発動機

この機体は中央公論新社から発刊された横山信義氏の「鋼鉄の海嘯」シリーズに登場した機体です。名前から見るとおり、この機体は史実に存在した機体です。旧日本陸軍の急降下爆撃機として知られている 99 式双発軽爆撃機です。

このシリーズでは英国の首相チャーチルがドイツ軍の空襲で死亡し、強力な指導者を欠いたイギリスが早期に降伏してしまい、ドイツのヒトラーがソ連に対する戦争を早期に始めました。

そして史実では南進か北進か迷っていた日本も、このドイツ軍の勝ち馬に乗る形で極東方面からソ連に対する侵攻を開始します。

日本は満州方面から北進を開始すると、陸海軍総力を挙げてソ連軍に襲い掛かります。もっとも、ソ連軍はまともな海軍力を持っていないので、戦いの中心は空戦と陸戦になります。

ソ連軍が強力な陸軍力を持っているのは史実どおりで、作中でも新型戦車である T34 やアメリカから供与された M3 などが日本軍の前に立ちはだかります。

これに対し、日本側も発動機をディーゼルエンジンに換装してライセンス生産した日本版4号戦車である1式中戦車1型（短砲身）と2型（長砲身）を配備して対抗しますが、これらをもつてしてもソ連軍は強力です。

そこで日本陸軍は新たに地上掃射機、所謂ガンシップを投入します。それがこの機体です。実機より機銃が多くなっていますが、それは爆弾倉を廃してそこに下向きに取り付けているためです。

戦車にとって、装甲が薄い頭上から攻撃を掛けられることはもともと厄介なことです。そのため、この地上掃射機は1式中戦車とともにソ連軍相手に大活躍します。

最終的にドイツと日本によってソ連は瓦解し、史実とは大きく違った歴史をこの世界では迎えます。日本は沿海州近海で起きた偶発的な衝突でアメリカとの戦争にのめり込んでしまい、一方ヨーロッパの覇者となったドイツは史実よりも強力な国力で連合国の前に立ちふさがります。

なおこのシリーズ、対ソ戦・対米戦・対独戦の3部構成シリーズになっており、対ソ戦ではここ最近の横山作品の特徴とも言つべき艦隊戦がほとんどないという珍しい作品です。

私見としましては、横山作品らしく多くの兵器は史実にあったものを延長させたに過ぎず、特に無理と言う感じはしません。ただし、日本がドイツから早期に戦車をライセンス生産する場面が少しばかり怪しいと言えましょうか。

そして最近の作品の傾向として、威力のある兵器よりも数を撃ち

込む兵器の威力を協調している感じがします。もちろん、それに
いての可能性はわかりませんが。

そうした点を除けば、これまでの横山作品と同じく大いに楽しめ
る熱い作品と言えます。

帝国陸軍 99式双発軽爆撃機 1型乙（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍戦艦「水戸」他

大日本帝国海軍戦艦「水戸」

全長283m 排水量85000t

武装53cm砲9門他

この戦艦は先日急逝された飯島祐輔先生の「黄金の艦隊」内に収録されている短編漫画「燃える大海嘯」に登場した戦艦です。この話は、太平洋上に突如海底火山の噴火によってあらわれた、石油や鉄・ボーキサイト、果てはムウ帝国の遺跡まである小島を巡って日米英独仏海軍（しかも戦艦だけ）がガチンコバトルをするという内容です。

なお、他にイタリアとソ連の戦艦も描かれていますが、これらは諸般の事情で戦闘には参加していません。

日本海軍の「水戸」は列強戦艦の中で最大口径の砲を持つ戦艦として描かれています。ところが、全幅が53mもあるため舵の利きが非常に悪く、さらに「大和」と同じく集中防御方式を採用しているので、非装甲区画が大きな割合を占めています。

そのためその重装甲を誇り笑う光圀提督に、水兵が「非装甲区画はやられているんですが。」と突っ込んでいます。

そして面白いのは欠点を持っているのは何も「水戸」だけではありません。残る米英独仏の各戦艦もそれぞれに欠点を有しています。

アメリカ海軍戦艦「モンタナ」

全長345 m

排水量7000 t

武装43 cm砲12門他

排水量に比してやたら全長が長いことがわかります。作中では「パナマ運河を通るために仕方がなかった。」と司令官がボヤいています。つまり、「アイオワ」級と同じくパナマ運河の幅に合わせて設計したということです。

しかしながら、その付けは大き全長が長すぎるためく荒天下では全くもって身動きが取れなくなり、また前後の砲塔の間隔が開きすぎており、主砲の照準が付きません（目視できる敵にも当てられない）。だから撃っても撃っても当たらないという事態に陥っています。

英国海軍戦艦「ライオン」

全長279 m

排水量6400 t

武装38 cm砲18門

主砲は38 cm砲と小口径ですが、なんと前後に4連装、3連装、2連装砲を1基ずつ搭載しているという無茶苦茶な戦艦です。しかも前後のシルエットを似せたため、「紛らわしい！」と非難されています。

また38 cm砲では日本海軍の「水戸」に被弾させても致命傷を与えられず、艦隊司令官であるホームズを憤慨させています。ちなみに、艦長の名前はワトソンです。

独海軍戦艦「フリードリヒ・デア・グロッセ」

全長273m 排水量62000t

武装40cm砲10門

全く持つてオーソドックスな戦艦です。さすがドイツらしい堅実な戦艦です。また電気推進式なので、荒天下でも高い機動性能を有しています。艦長も登場人物の中で一番まともです。「諸君冷静になるのだ。プロイセン軍人は如何なる時も落ち着きを失わないのだ。」的な発言をしています。

なお主砲配置は前部に連装砲2基、後部に3基という日本の戦艦「加賀」に近い方式を採っています。

仏海軍戦艦「ガスコニユ」

全長270m 排水量58000t

武装40cm砲10門

こちらもスペックだけ見れば平凡な艦です。ところが、なんと40cm砲は5連装砲となっています。フランス海軍が4連装砲を採用したのは有名ですが、その砲は故障が頻発したとも言われています。作中でも「ついに5連装までエスカレートした」と書かれています。命中率というメリットを考えても、いかななものかと思っしまいます。

また司令官も、勤務時間中にワインを飲み、艦長と落語の親子酒をやっているという墮落ぶりです。

私見ですが、取り敢えず突っ込みどころ満載です。しかしながら、この漫画自体はあくまで戦艦にバンバン撃たせるギャグ漫画です。話の帰結もオチで終わっています。だから、戦艦の性能云々に突っ込むべきではないかもしれません。

戦艦で笑い話を作るといって、ある意味突飛な話ではありませんが、その分非常に面白い話でした。同様の短編である「GO!GO!ビスマルク」や、その後の「新旭日の艦隊」に繋がる部分があります。飯島先生の急逝が残念であります。

飯島先生に対して哀悼の意を改めて表明します。

帝国海軍戦艦「水戸」他（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍巡洋戦艦「穂高」他

帝国海軍巡洋戦艦「穂高」

全長267m

排水量42000t

速力36ノット

ノット

武装40cm砲連装4基8門

14cm砲14門

同型艦「妙義」「乗鞍」「雲仙」

この艦は大村芳弘先生原作、実業之日本社より発刊された「韋駄天艦隊」に登場した巡洋戦艦です。この小説内では、第一次大戦以降も巡洋戦艦（高速で装甲の薄い戦艦）の天下が続き、各国は競って巡洋戦艦を作り続けています。

その結果航空機の発達が遅れてしまい、史実から見て1世代古い飛行機（例えば零戦の場合は96戦にあたる戦闘機が主力）が使われています。

日本海軍では「金剛」級以降の建造計画が全く違ったものとなっています。戦艦の建造が行われないだけではなく、巡洋艦や駆逐艦も巡洋戦艦が35ノット以上の高速で走るため、史実のような35ノット止まりの重巡洋艦や軽巡洋艦は建造されていません。

その代わりに建造されたのが巡洋駆逐艦で、作中では2つの型が登場しています。

帝国海軍巡洋駆逐艦「霧雨」

全長 排水量3500t 速力

武装15、2cm連装砲2基4門

魚雷発射管1基（門数の記述なし）

同型艦7隻

帝国海軍巡洋駆逐艦「青波」

全長 排水量3600t 速力38ノット

武装12、7cm3連装砲3基9門

魚雷発射管4連装1基4門

同型艦7隻

これらの艦艇が凄まじいスピードで洋上を疾駆し、同様に巡洋戦艦を主力とする米太平洋艦隊と壮絶なる砲撃戦を行います。

しかしながら、第二次世界大戦が始まり独英の巡洋戦艦同士が海戦を行ったことで、巡洋戦艦の弱点である防御力の問題が露呈します。独英の巡洋戦艦がそれぞれ装甲が薄いために撃沈され、各国では装甲の補強や増加が行われるようになります。

さらに、太平洋での戦いが始まると今度は航空機が台頭していき、高速とは言え水上を走る船にしか過ぎない巡洋戦艦は一気に凋落の道を歩みます。

作中では日本海軍が航空機の集中運用に成功し、アメリカがその

生産力で盛り返すと言う史実と同じように歴史は流れ、最終的な流れは史実とほぼ同じです。

ただし、巡洋戦艦だけの各国海軍と言うのも中々個性的で面白いと言えるでしょう。

私見としては、大村先生の作品は全般的に他の先生の作品よりも細かい設定が粗いと言う特徴があります。どちらかと言うと、架空戦記と言うより架空海戦記と思える作品です。その分読みやすい作品に仕上がっているので、サクッと楽しみたい人にお勧めです。

また、人物に関しても今作中では空母ではなく巡洋戦艦使いとして、私の尊敬する山口多聞中将が主人公として登場します。燃える山口提督好きと言う人にもお勧めです。

他の日本巡洋戦艦については以下の通りです。

巡洋戦艦「天城」

全長 排水量 4 0 0 0 0 t

速力 3 5 ノット

武装 3 6 c m 砲連装 5 基 1 0 門

1 4 c m 砲 1 6 門

同型艦「赤城」「高雄」「愛宕」

巡洋戦艦「蔵王」

全長 排水量5600t 速力38ノット

武装40cm砲連装4基8門

12.7cm連装高角砲6基12門

同型艦「八甲田」「大雪」「磐梯」

巡洋戦艦「道後」

全長 排水量5800t 速力37ノット

武装40cm砲3連装3基9門

12.7cm連装高角砲12基24門

同型艦「石鎚」

そして「道後」級を空母に改装した艦も登場します。ただし、作中ではほとんど活躍せぬまま終わりました。

航空母艦「開聞」

全長 排水量5450t 速力38ノット

武装12.7cm連装高角砲8基16門

搭載機90機

同型艦「国見」

帝国海軍巡洋戦艦「穂高」他（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍四三式艦上戦闘機

帝国海軍四三式艦上戦闘機

全長10'5m 全幅13'2m 自重3520kg

速力630km 航続力1800km

武装12'7mm機銃6門

爆装500ポンド

発動機P&W R2800:8ダブルワスプ空冷2000馬力

姉妹機米国海軍艦上戦闘機F5F「シーキャット」(サンダーキャット) 米陸軍戦闘機P145

以前紹介した共和日本戦闘機「疾風改」、帝国海軍航空母艦「天鳳」と同じ羅門祐人氏原作、実業之日本社発行の「流浪の連合艦隊」シリーズに登場した機体です。

この機体はアメリカに亡命した亡命帝国海軍とアメリカ合衆国用に製作された機体で、作中ではF6F「ヘルキャット」を譲渡された「零戦」を元に改良した機体となっています。このためF6Fは中止となり、本来は本命であったF4Uに至っては戦闘機から爆撃機に転換されるという展開になっています。

ちなみに、羅門先生の作品では時々F4Uが艦上爆撃機に改良されて登場したりします。どうやら、これは作者の好みが大きいようです。

さて、「零戦」の旋回性能と「ヘルキャット」の力強さを兼ね備えた戦闘機と言うことで、さぞや強力そうに見えるのですが・・・残念ながら作中ではライバルである共和日本海軍の「疾風改」に性能面で劣る描写が出てきます。

本来「ヘルキャット」ですら旋回性能の良い機体の筈だったのですが。と言うより、この作品では何故か共和日本海軍の航空機や艦艇のほうに、アメリカ海軍や亡命帝国海軍より強く描かれています。

またアメリカ海軍名が何故か「シーキャット」と「サンダーキャット」の二通りあり、謎な部分が多々見受けられます。

なお、当初は皇紀に合わせて3式艦上戦闘機でしたが、途中から連合軍の兵器名称に合わせて西暦の43式に切り替えられています。

私見としましては、やはり「疾風改」に比べてあまりにも地味すぎる面が否めません。歴戦の帝国海軍パイロットが操縦している分も加味すれば、もっと活躍できたと思うのですが。空戦の描写は全6巻中1回だけしか書かれず、それさえも共和日本側からの視点でした。

なお、亡命帝国海軍がしようする艦上機は他に2機種あり、こちらも紹介しておきます。

四三式艦上爆撃機

全長10'2m

全幅15'5m

自重4380kg

速力592km

航続力1800km

武装 12 7 mm 機関銃 3 基

爆装 1000 ポンド

発動機 P & W P - 2800 : 8 ダブルワズプ空冷 2000 馬力

F4U 艦上戦闘機を複座化し、ダイブブレーキを追加。米海軍では採用せず、海兵隊との共用機。一部の機体は夜間戦闘機に転用。

四三式艦上攻撃機

全長 12 2 m

全幅 16 6 m

自重 4600 kg

速力 450 km

航続力 1800 km

武装 12 7 mm 機関銃 3 基

爆装 1 t 又は魚雷 1 本

発動機

史実にも存在した「アベンジャー」雷撃機その物、座席を日本人の体格に合わせると共に、燃料タンクを改良して航続力の延長を図った。

一番地味な機体であるにも関わらず、作中では友永中佐と淵田中佐が搭乗してソ連正規空母「ベーリング」を雷撃のみで撃沈した。

帝国海軍四三式艦上戦闘機（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお今回搭乗した機体は「ゼロ戦才人」シリーズに登場させています。

ブリースター・バッファロー艦上戦闘機

今回はちょっと趣を変えて、史実の兵器が架空戦記内において意
外な活躍をした話を紹介したいと思います。まず、取り上げる航空
機F2A「バッファロー」について。

F2A「バッファロー」は1937年に試作機が登場し、制式採
用の上1939年から米海軍に引渡しを開始した艦上戦闘機です。
米海軍初の単葉艦上戦闘機としてのデビューでした。

しかしながら、「バッファロー」を製造したブリースター社の
生産能力が低すぎたため引渡しが遅れ、さらに性能的にも優れたグ
ラマン社のF4F「ワイルドキャット」の登場により、早々と海軍
からは撤退し、海兵隊用ならびに輸出用戦闘機となります。

「バッファロー」の名前とは裏腹に、実機はピア樽のように太った
機体で、お世辞にも格好良い機体と言えません。そして第二
次世界大戦においては既に性能的には2線級戦闘機となっていまし
た。

そのため、英国へ輸出された機体は、早々とドイツのメッサーシ
ュミットに合わない判断されて極東送りとなっていました。

ドイツ軍機には適わないが、日本軍機にならこれで十分と投入さ
れた極東英空軍ならびに蘭印軍に投入された機体は、日本陸海軍の
零戦と「隼」の前に苦もなく捻られ、さらにアメリカ海兵隊の機体
もミッドウェーにおいて一方的に敗れ去り、「バッファロー」戦闘
機の太平洋方面における戦績は散々な物となりました。

一方で、北欧フィンランドに輸出された44機は優秀かつ機体性能を熟知したパイロット、不必要な装備を省いた身軽な機体、さらにはソ連側のパイロットの錬度不足も相俟って、大活躍をしました。最終的に敗北に近い休戦となったものの、戦闘全期間の喪失と戦果の比率は1対2.1と言う輝かしい物となりました。

このフィンランドにおける大活躍は、小国が大国に一矢報いたことと相俟って、同機の評価を2分するものとなりました。

また日本軍に鹵獲された機体は、日本において一般国民向けに公開されると共に、連絡機として使用されたり、映画「加藤隼戦闘機隊」では英国軍の塗装に塗りなおして敵機役として登場したりしました。そのため、日本人にとっても単に戦果を稼ぐだけの存在ではありませんでした。

そんな「バッファロー」は架空戦記でも意外な活躍をしています。

まず川又千秋氏の「血風インドシナ空戦録」。この小説は東南アジアにある架空の王国メルクワット空軍で戦う日本人パイロットの物語で、表紙に拠れば架空戦記ではなく風と翼のアドベンチャーとなっています。

この物語の中で、「バッファロー」は日本からメルクワットに10機が当初予定されていた零戦の代替機として供与されました。蒼い三角形に金色のブッタ像をあしらったメルクワット空軍マークを装って、米陸軍のP40戦闘機やP51戦闘機、さらに続編の「超音速ドラゴン伝説」ではなんとフランス空軍のF8Fとも空戦を行い、メルクワットの空を守りました。

ちなみに、作中ではメルクワット語で野牛を指す「ブルーフ」戦

闘機と呼ばれています。また、なんと2巻では堂々と表紙に登場しており、かなりの厚遇を受けています。

次に吉岡平氏の「北海の墮天使」においては北欧の架空国家トルステイン公国海軍の艦上戦闘機として登場します。

北海で無法の限りを尽くす海賊戦艦「ヨツンハイム」を打倒するべく、同じくアメリカより購入された「デバステーター」と共に、小型爆弾を搭載して空母から出撃します。ただし、竣工してから日が浅いためパイロットの訓練が不十分であり、発艦は出来ても着艦は出来ないと作中で語られています。

ちなみに発艦した空母「ブリシंगाメーン」は改「蒼龍」級の日本製空母です。

しかしながら、ここでの「バッファロー」は「ヨツンハイム」のレーダーに早々と探知され、さらに一方的に加えられた46cm砲の対空用榴散弾の攻撃によって壊滅してしまいます。

最後に安芸一穂氏の「暁の旭日旗」。このシリーズの世界では、モンハン事件によって満州と朝鮮から撤退した日本と、ドイツとの戦争に勝利し、海軍力を強化して朝鮮進出を狙うソ連との戦いを描いています。

この中で、「バッファロー」は中国共産党軍が国民党軍から鹵獲した戦闘機として登場し、同じく共産圏となったドイツから供与されたFw190Dと共に運用されています。

戦闘シーンはあまりありませんが、旅順爆撃に向かった米海軍攻撃隊のF6F（だったと思います）を撃墜するシーンがあります。

こんな感じで、史実でも意外な活躍をした「バッファロー」は、架空戦記でも意外な活躍をしているのです。

最近の架空戦記ではほとんど出てきませんが、作者としてはビア樽のような機体に愛嬌を感じており、好きな戦闘機の一つです。

ブリュースター・バッファロー艦上戦闘機（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

大英帝国海軍輕巡洋艦「サンダーチャイルド」

大英帝国海軍輕巡洋艦「サンダーチャイルド」

全長

排水量

速力

武装

同型艦ナシ

今回は初めての英国艦です。その名も「サンダーチャイルド」です。もしかしたら一部の方は既にこの艦の名前に聞き覚えがある筈です。

実はこの艦が登場したのは伊吹秀明氏原作、KKベストセラーズより発行された「第二次宇宙戦争」内です。この小説は、かのSF超大作H・G・ウェルズ原作の「宇宙戦争」の世界の1930年代を描いた作品です。

原作同様火星人の侵略はバクテリアによって火星人が死滅したことで辛うじて防がれた所までは同じですが、その火星人の侵略が各国に対して同時多発的に行われたことと、その後地球各国が火星人が残した兵器を元に、多脚戦車や熱戦砲を開発したという世界観で物語は侵攻します。

キャラクターの動きや細かい設定は読者の皆様方自身で読まれるのを推奨します。

そんな感じで、多少の違いはありますがこの世界の地球は現実世界の地球とほぼ同じ流れで進んでいきます。しかしながら、火星人は再度の地球侵略を目論んでいました。

そしてついに、火星人は20年ぶりに地球に対しての攻撃を開始します。この作品自体は、この火星人の再侵攻を追う日本人の主人公の動きがメインです。

その時イギリス南部のマーゲイト沖では英国国王ジョージ6世の戴冠記念観艦式が挙行されおり、「サンダーチャイルド」はイギリス海軍のホストシップとして登場します。

原作内の「サンダーチャイルド」はラム装備の駆逐艦で、テムズ河河口付近において、英本土から脱出する船団を守るため、テムズ河に進入した火星人の多脚兵器に対してラム戦を挑み、2機を撃破して自らも沈没しました。

この作品では、その偉功を讃えて改「サウザンプトン」級軽巡の同艦の艦名が引き継がれたと言う設定です。元となった「サウザンプトン」に比べて、指揮通信設備が強化され、艦橋構造物が大型化しているのが特徴です。

そしてまた、「サンダーチャイルド」に座乗する英国艦隊司令官のジョン・トーヴェイ大將は士官候補生として先代「サンダーチャイルド」に乗艦し、奇跡的に生還したと言う設定も加わっています。

同艦の見せ場は、観艦式に集まった各国艦隊と共に再度地球侵攻

を目論む火星軍と白熱した海戦シーンです。

前回以上の規模の大群で、しかも前回の侵攻にはなかった飛行兵器や前回と同じく強力な熱戦砲と毒ガスロケット弾を使用する火星軍に対して、地球側は大口徑砲と対艦・対空用熱戦砲で反撃を行います。

果たして地球人と火星人の攻防の結果は・・・読者の皆様自身で御確認下さい。ただし、私自身手に入れるのに非常に苦労しましたのを付け加えておきます。

考察ですが、地球の技術で火星の兵器を模倣できるかと言う突っ込みさえしなければ楽しめます。また、この「第二次宇宙戦争」自体海戦シーンや陸戦シーンはどちらかと言うと添え物で、それらはほとんど関係しない主人公たちの動きの方がメインです。

それでも、さすがは架空戦記の第一人者の伊吹先生だけあって、思わずニヤリとする設定が随所に散りばめられています。

上記の「サンダーチャイルド」もそうですが、例えばワシントン軍縮条約では戦艦の保有量に加えて火星産の熱戦兵器の保有量が審議されています。

なお、作内で火星兵器の開発でトップを進んだのは原作の舞台となったイギリス、続いて工業力を持つアメリカ、そして熊本が火星人の侵攻を受け、火星兵器を捕獲した日本と言った順番になっていました。

しかし熱戦砲（或いはレーザー砲）搭載の第二次大戦型軍艦と言うのは、中々に面白そうです。

また、挿絵は1箇所ありませんが、表紙は非常にインパクトのある物になっているのも特徴です。

大英帝国海軍輕巡洋艦「サンダーチャイルド」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

なお、今回は性能データの資料が手元になかったので後日載せま
すね。

戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」

大英帝国海軍戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」

全長227m

排水量36727t

速力28ノット

武装36cm砲10門

13・3cm両用砲16門

40mmポムポム砲16挺

大英帝国海軍戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」と言ったら、KG?級戦艦の2番艦で、史実では日本海軍陸攻隊の攻撃を受けて開戦早々マレー半島沖にて沈んだ艦です。大英帝国海軍の最新鋭戦艦ながら、日本艦隊と戦闘を交えることなく、それどころか史上初の航行中を航空機によって沈められた戦艦としてその名を残してしまいました。

さらに言えば、名前時代が王位を捨てたエドワード8世を示す物なので、当時から縁起の悪い艦と言う話があったとかなかったとか。

一方、架空戦記の世界ではと言うと・・・まあ、やっぱり沈められる作品も多いんですね。しかしながら、それ以外にも敵国であるドイツや日本に捕獲されてしまうと言う作品まであります。今回はそんな作品を一部紹介していきたいと思います。

まずこれまでも何度か登場した中里先生の「東の太陽西の鷲」シリーズ。この作品では、日本海軍が砕氷空母と砕氷戦艦を建造し、北極海周りで艦隊をヨーロッパに派遣し、バトル・オブ・ブリテン take the 英吉利海峡近海で英本国艦隊と戦闘します。

この結果英本国艦隊と英空軍は壊滅的な打撃を受けてしまい、さらにドイツが英本土上陸作戦を成功させ、大英帝国は日独に降伏します。

こうして英国との戦いは枢軸の勝利で終わりますが、これによって枢軸軍は多数の戦利品を手に入れます。作中ではレーダー技術の捕獲が大きく書かれています。艦艇に関しても日独両海軍が英国海軍の艦艇を取得しています。日本海軍はヒトラーの好意によって戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」（以後POW）と空母「インドミダブル」を手に入れました。

そしてPOWは日本海軍戦艦「讃岐」となって米海軍と戦うこととなります。なお、性能その他については作中に具体的な記述がなかったので悪しからず。

次に吉田親司先生の「第零艦隊血風録」シリーズ。この作品では日本に沿岸警備隊と言うか第二海軍と言うべき日本強制救助機構（通称零艦隊）が陸軍の後ろ盾で設置され、日本海軍と共に独自の艦艇を使って米英軍と戦うと言うストーリーです。

このなかでPOWは、マレー沖海戦で日本海軍と零艦隊との戦いで損傷、座礁してしまい零艦隊によって拿捕されてしまいます。そして修理復旧の上多目的巡視艦「マゼラン」として、今度は米英軍相手に戦うと言うものです。細かい活躍については、読者の皆様の目で御確認下さい。

日本強制救助機構多目的巡視艦「マゼラン」

全長233m

排水量36980t

速力29.5

ノット

武装36cm砲4門

12・7cm高角砲16門
25mm機銃36挺

修理の際に2番砲と3番砲が撤去され、後部甲板には魚雷艇を搭載可能としているのが大きな特徴です。

なお日本海軍が拿捕して使用する例としては、他に秋月達郎先生の「帝国の決断」と林譲治先生の作品に1作品あります。他に安芸一穂先生の「旭日旗往く」では、「ライオン」級戦艦3、4番艦を日本海軍が購入して「土佐」級として使用しているシーンがあります。

次に日本以外の国が使用する例では、同じく安芸一穂先生の「旭日の戦旗」。この作品ではドイツが英本土上陸作戦を成功させていますが、日本はイギリスとアメリカの同盟国と言う設定です。この作品ではPOWはイギリス海軍に残っていますが、3番艦以降がドイツ海軍に捕獲されてしまい、なんと同型艦同士の砲撃戦が展開されます。

同様にドイツ海軍に使用される例としては、横山信義先生の「鋼鉄の海嘯 - 欧州解放」の中にもあります。この中ではドイツ海軍戦艦「ザクセン」級として登場しています。

POW、もしくはKG?級戦艦は架空戦記内で、かなり毛色の変った活躍をしているようです。

戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍航空海防艦「伊勢」

帝国海軍航空海防艦「伊勢」

全長213 / 4 m 排水量31870 t 速力25 / 8

ノット

武装36cm砲4門

10cm高角砲20門

25mm機銃18挺

噴進砲12基

搭載機26機

同型艦「日向」

今回取り上げるのは、私が大好きな小説作家の1人、安芸一穂氏原作の「旭日の戦旗」に登場した航空海防艦「伊勢」です。しかしながら、ここで大問題が。そもそも航空海防艦とは何ぞや？と言う話です。

それを語る前に、この小説内における世界情勢を簡単に説明しましょう。この小説内では日本とアメリカが共同で満州を開発し、その結果満州には満州族や日本人と言った史実の五族だけではなく、アメリカなどから流入した白人、黒人までを包容した満州合衆国が成立しています。

こうした状況から、日本は米英とは対立せず両国の同盟国となっ

ています。

しかしながら第二次大戦は歴史どおり起こり、しかもダンケルクで大陸派遣軍を撃破したドイツ軍はそのままの勢いを維持し、英国を占領してしまします。この結果英国政府は本土から脱出を余儀なくされ、さらに戦艦や空母の一部をドイツ軍に拿捕されてしまします。

こんな状況下で、日本海軍は在欧州邦人救出のため地中海経由で艦隊を派遣しますが、その内の戦艦「扶桑」がUボートに英戦艦と誤認され撃沈されると言う事件が発生。これを境に日独関係は悪化し、さらにドイツと結んだソ連が西での戦争がないとして日本に攻撃（しかも本土空襲）をかけ、ついに日本も第二次大戦へと突入します。

さて、日本が島国でありその生命線が海上交通路にあるのはもはや論を持たない所ですが、この世界の日本海軍はそのための戦力の整備にあたります。給油艦としての機能を持たせた軽空母や対潜護衛艦の建造です。

そしてその計画の一つとして行われたのが、旧式戦艦の護衛艦艇としての転用です。結果「伊勢」、「日向」、「山城」が戦艦から航空海防艦として改装されます。この内「伊勢」は開戦時のソ連軍による空襲で大破着底したと言う設定です。

史実において、「伊勢」と「日向」は航空戦艦に改装されましたが、航空機が揃わなかったために航空母艦としての戦力にはなりえませんでした。

しかしながら、この作品では全く事情がことなります。まず改装

内容が大きく違います。主砲塔は1、2番を除いて全て撤去され、艦橋も艦中心線より右舷側に寄せられ、空いたスペースに斜めに走る飛行甲板と航空機よう格納庫が設置されました。もちろん、搭載航空機は全て車輪付きの艦上機です。

さらにはカタパルトやサイドエレベーター、大型救難艇も装備され、まさに最強の船団護衛艦となって戦場へと馳せ参じます。

船団護衛を行い、なおかつ航空機を多数搭載するので航空海防艦と言っわけです。ただし、艦首の菊の御紋章は特例として健在となっています。

史実においては、航空戦艦や航空巡洋艦は残念ながら活躍できる素地がありませんでした。加えてどっちつかずの中途半端な性能であったことに加えて、適切な用兵がなされなかったのも大きな問題です。

しかしながら、この作品では純粹に船団護衛のみに的を絞っています。潜水艦には航空機で、水上艦（特にドイツの装甲艦）には2基の36cm砲で対抗できると言うことです。

もちろん、船団護衛であるため地味な活躍しか与えられませんが、史実の「伊勢」以上の活躍をしたのは間違いないでしょう。

私見としては、紺碧の艦隊に登場する航空巡洋艦「東光」と似たようなコンセプトの艦であり、外見も似ていますが、改装や運用に関する描写がより細かく描かれている点が評価できます。また、私自身航空ナント力は意外と好きなので、あつたら楽しそうな軍艦だと思っています。

帝国海軍航空海防艦「伊勢」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国陸軍 97式中戦車「チハ」

史実において大日本帝国陸軍が開発した97式中戦車は、登場時は同時代の列強戦車にそこまで遅れている部分はありませんでした。むしろディーゼルエンジンの採用や、ある程度の発展性の余地（主砲の換装）を含んでいるなど、見るべき点が多数あったと言えます。

ところが、97式中戦車（またの名をチハタン）の悲劇は運用している軍隊が自動車生産能力に劣り、なおかつ歩兵中心主義の日本陸軍であったこと。本来ならノモンハンの翌年には47mmの高初速砲を搭載（ついでに装甲も強化）、さらに翌年には75mm野砲搭載位のスピードで改良が進めばかなり活躍できた筈なのに、元々戦車に熱心ではない日本陸軍による改良は遅れに遅れてしまいました。

47mmの高初速砲を搭載した1式中戦車や75mm砲を搭載した3式中戦車（いずれも装甲強化や溶接の採用などそれ相応の防御力強化がなされた）はいずれも間に合わず、3式に至っては米軍が90mm砲装備のM26を投入している時期にようやく生産が細々と行われた始末。

こうしてチハは、旧式の対歩兵用砲を搭載したまま、あるいは主砲は換装したが防御力は最大装甲25mmのまま、太平洋戦争を戦わされる破目に陥り、その軀を太平洋中に晒すこととなりました。

そんな不憫なチハではありますが、実は架空戦記では時折大活躍しています。時折なのは、やはりと言うべきは架空戦記内でも「やられ役」にされてしまうことが多々あるからです。

今回紹介して行くのは、もちろんそんなやられ役ではないチハたちです。なお、取り上げるのはこれまでになく、かなり現実的な車両ばかりであることを、予めお断りしておきます。

まず紹介するのは、林讓治先生原作の「兵隊元帥欧州戦記」シリーズに登場したチハです。この物語では、日本陸軍が中立国である内に1個大隊（だったと思います）を中東戦線に送り込み、そこから始まる歴史改変が主な流れとなっている。

この中で、序盤で大活躍するのがチハをドイツ軍工廠で改造した、北アフリカ戦線バージョンです。この車両は主砲を非力な57mm短砲身から、ドイツ軍3号戦車用の長砲身50mm砲に換装しています。しかも、砲塔ごとの換装したため照準機器などもドイツ軍使用とグレードアップし、ロンメル將軍の指揮下の元で大活躍しました。

次に紹介するのは、高貫布士先生原作の「列日の海戦」シリーズに登場した1式中戦車改です。この車両も主砲を換装したタイプですが、換装した砲がイギリス製の6ポンド砲をコピーした57mm長砲身砲とされ、フィリピンにおいて米軍のM3軽戦車や中戦車相手に奮迅しています。

なお、高貫先生の場合は同様の設定を他作品にも採用する傾向があり、この57mm長砲身砲搭載車両も、砲の出自（鹵獲か供与）に違いがありますが、幾つかの作品に登場しています。

加えて、同先生の作品では厳密にはチハではありませんが、3式中戦車に4式中戦車の長砲身75mm砲を搭載したタイプや、3式砲戦車にイギリス製の17ポンド砲を搭載した派生車両なども登場しています。

この他にも、かなり個性的な車両（88mm砲を搭載した自走砲等）もあるそうですが、私自身そうした作品においては未読な物も多く、また今後も何かしら新しい車両が登場することを期待しているものです。

帝国陸軍97式中戦車「チハ」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍防空巡洋艦「古鷹」

帝国海軍防空巡洋艦「古鷹」

全長185.2m

排水量8760t

速力34.5

ノット

武装12.7cm連装高角砲5基10門

8cm連装高角砲4基8門

25mm機銃68挺

同型艦「衣笠」

この艦は横山信義先生の「海の牙城」シリーズに登場しました。完全なオリジナルではなく、史実の艦を独自設定で改装したものです。

史実の「古鷹」型は太平洋戦争において、日本海軍で最も古い重巡洋艦として参戦し、準同型艦の「青葉」型と共にソロモン諸島における戦い、特に第一次ソロモン海戦で大活躍したのは有名な話です。

しかしながら、この作品に出てくる「古鷹」は何と防空巡洋艦となっています。竣工以来の主兵装である20cm砲を全て取り払い、さらに対艦戦闘では必殺兵器とも言える水雷兵装さえ取り払い、12.7cm高角砲と8cm高角砲を搭載出来るだけ搭載した、ハリネズミとなっています。

史実の日本海軍でも、防空巡洋艦の建造計画並びに既存艦の改装

計画が存在しました。事実5500t軽巡の1隻である「五十鈴」が防空巡洋艦となり、エンガノ岬沖海戦において活躍しました。また防空駆逐艦である「秋月」型も建造されましたが、結局の所日本海軍の防空艦整備は不徹底に終わりました。

しかしながら、この世界では旧式とは言え重巡洋艦が防空巡洋艦に改装され、機動艦隊の防空をになっています。

実はこのシリーズ、大艦巨砲小説家（ただし最近は違いますが）と言われる横山先生には珍しく、航空機が主役とも言うべき内容なのです。

まずストーリー自体が、日米開戦が日本の真珠湾奇襲ではなく、アメリカ軍の柱島奇襲で始まり、日本海軍の主力戦艦が撃沈されると言うところから始まります。この攻撃と、その後の戦闘で航空機が戦争の主役と悟った日本海軍は、急速に航空戦力を整備し、戦艦「武蔵」を突貫で空母に改造し、さらに戦時急造空母や新型機の開発促進、そして防空艦艇の整備を急ぎます。

その防空戦力の整備の中に、この「古鷹」型防空巡洋艦の改装計画があったということです。そして作中では、空母部隊に攻撃をかける米攻撃隊に対してその防空戦闘能力を如何なく発揮しています。

また「古鷹」以外にも「阿賀野」型軽巡が同様に防空巡洋艦となっており、さらに「秋月」型は魚雷兵装を載せず完全な防空駆逐艦となっています。

私見としては、特に実現性の低いわけではなく、非常に手堅い設定の艦艇だと思えます。欲を言えば、もう少し活躍させて欲しかったと言う所でしょうか。なお、この防空巡洋艦型「古鷹」は以後の

横山作品に登場している姿が確認できます。

また「海の牙城」シリーズは二人乗り「天山」や二人乗り「彩雲」や徹底的な空母化改装を受けた「信濃」など、そこまで斬新とは言えないながら新鮮な兵器が登場するとともに、重雷装艦や戦艦「大和」の大活躍など、大艦巨砲ファンにも堪らない内容となっています。

帝国海軍防空巡洋艦「古鷹」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

最近mixiを始めました。YADAMON山梨在住で出てくるはず。

架空艦隊考察 上

今回も、ちよつとばかり趣向を変えた話をしたいと思います。巷に溢れる架空戦記には、様々な魅力溢れる艦船や航空機、戦車が登場します。そして当たり前ながら、それを運用するのは軍隊というのが相場です。

しかしながら、現実世界において民間の軍事請負企業や重武装の警備会社があるように、軍隊ではない軍事組織が登場する作品も、それなりに見られます。また軍隊内においても、本来の軍隊とは明らかに異質な組織という物もあります。今回は、そんな組織にスポットを当てて行きたいと思います。

まず最初に紹介するのは、もはやこのシリーズでも何度も紹介した羅門祐人先生の「独立愚連艦隊」シリーズ登場の愚連艦隊です。この艦隊は当初、海軍総司令部（軍令部の間違い？）附属の特務実験艦隊からスタートし、その後愚連艦隊という正式な艦隊となり、さらに帝国海軍から独立した第3軍になり、最終的には世界的な組織として、陸海空全ての戦力を包括した愚連艦隊総司令部（英語名G H Q）にまでなっています。

2巻以降はハチャメチャ戦記ですが、1巻だけはガチ系です。その1巻だけにスポットを当てると、海軍内部に連合艦隊とは違う独立した艦隊を設けると言うのは、中々に異質です。似たような話に橋本純先生の「第七航空艦隊戦記」に登場する第七航空艦隊や、鷹見一幸先生の「大日本帝国第七艦隊」に登場する第七艦隊などがあります。いずれも連合艦隊の指揮下にある艦隊です。

史実の帝国海軍においては、各艦艇は最低でも鎮守府所属となっ

ていますから、その所属さえなく海軍総司令部に附属する特務実験艦隊直属と言うのは制度面でも変り種です。言うなれば艦政本部が空技廠、もしくは海軍技術研究所直属艦隊となります。

実際にこんな艦隊があつたら、予算の無駄遣い甚だしいですけどね。

また艦艇や航空機も連合艦隊とは違うオリジナルと言う点も面白いです。もつとも、この点は批判されている点でもありますから、一概に判断することは出来ません。

続いて現在も刊行されている林譲治先生の「興国の楯」シリーズ。この中では通商護衛機動艦隊と言う組織が出てきますが、これは海軍ではなく通信省（現在の国交省に相当する）が造った船団護衛用の組織で、艦艇や航空機は海軍と似たものを使用していますが、艦艇や階級の呼称などが違つと共に、さらに海軍とも陸軍とも違つ理念で動いている点が興味深いと言えましょう。

加えて、この通商護衛機動艦隊（作中では通商さんと言う愛称まである）は独自採算のため、自らで色々と手広く商売をやるというのも、軍事組織とは違つ一面であると言えましょう。

ちなみに、この通商さんは海軍からは「似非海軍」と揶揄されています。

架空艦隊考察 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

架空艦隊考察 下

前話に引き続いて、組織としての架空艦隊について紹介していきます。

続いて紹介するのは吉田親司先生の「第零艦隊血風録」に登場した、日本強制救助機構について。この組織は陸軍の後ろ盾の元で創設された現在の海上保安庁、アメリカの沿岸警備隊に近い組織と言えます。

しかしながら、実際の艦艇や航空機などの戦力は海軍を補完するものであり、さらに陸軍が自軍の支援をさせると言う思惑も絡んでおり、中々面白い組織です。

ちなみに、戦艦や空母まで巡視船と呼んでいるのが、なんとなく自衛隊に近いように感じられます。

ここまでは、帝国海軍以外の組織が運用する艦隊でしたが、ここからはさらにその中でも毛色の違う物を紹介します。ここから紹介するのは、一風変わった民間による軍事組織の艦隊です。

民間による軍事組織は、既に現実にも存在し、特にイラク戦争以後はその活躍に拍車が掛かっていると云えましょう。

しかしながら、そうした組織は大概軍の基地における業務の肩代わりや、せいぜい警備などの小規模な陸上戦闘を行うのが関の山です。もちろん、艦隊や空軍を持つなど有り得ません。

架空戦記においては、この民間企業による艦隊と言うのがちゃん

と存在しています。

一つ目は（上）でも紹介した「独立愚連艦隊シリーズ」に登場するシュナッププリント特殊艦隊。この艦隊はアメリカ随一の財閥のトップ、シュナッププリント総帥が造った艦隊です。ちなみにこの親父、自分は金持ちの癖して、艦隊の予算はアメリカ合衆国の国防予算から掠め取るものだから、正規軍が涙目な事態に陥っていました。

また海軍軍人の息子や、全く関係ない娘までがタイフーン艦隊、ハリケーン艦隊を設立して、やはりやりたい放題やっていました。

続いて大村芳弘先生の「民営海軍出撃す」に登場する、極東海上警備。こちらは海現実の郵政民営化を参考に、軍の一部が民営化されたという設定です。自分たちでお金儲けをしなければならぬので、敵対国の要請でも、金さえ受け取れば出撃すると言う、真の商売する軍事組織です。

商売する面では通商護衛機動艦隊に似ていなくもないですが、通商さんが日本のためしか働かないという大前提があり、大規模になる一方だったのに対して、極東海上警備は1隻の航空巡洋艦と数機の航空機で戦い抜くのが大きく違います。

次に紹介するのは、竹内誠先生の「航空戦艦大逆襲」シリーズに登場する実験艦隊。この艦隊は航空戦艦、航空巡洋艦を中心とした艦隊で、籍は帝国海軍ですが、その建造資金は司令官夜多部少将が民間からの融資や、民間への技術の転売、そして実家の財閥から出してもらっていると言う設定でした。

また題名どおり、航空戦艦が大活躍するのも特徴です。

最後に、またまた羅門祐人先生の「独立日本艦隊」シリーズに登場する独立日本艦隊。こちらは、史実では倒産した鈴木商店が、政府の融資の下で存続し、その対価として台湾防衛ならびにシーレーン警備用の企業（日本航路警備）と艦隊を造るという設定です。

植民地警備艦隊（場合によっては帝国海軍の決戦予備戦力）を民間に持たせるという設定も然ることながら、オリジナルの艦艇や航空機を多数登場させたのが羅門先生らしい艦隊です。

架空艦隊考察 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍艦上戦闘爆撃機「爆風」12型

帝国海軍艦上戦闘爆撃機「爆風」12型

全長12'3m

全幅14'4m

自重3872kg

速力573km

航続力1850〜2989km

武装7'7mm機銃2挺

爆装1t又は魚雷1本（改良型の1

4型では1、6t）

20mm機銃2挺

発動機「火星」21型空冷1950馬力（31型以降はハ104）

乗員1又は2名

今回は久々に、架空戦記に登場した架空機を単品で紹介したいと思います。その名も「爆風」。内田弘樹先生原作の「紅蓮の翼」に登場した、単発戦闘攻撃機です。

この作品は、架空戦記では珍しい短編を集めた形の小説で、所々でリンクしているものの、基本的に1話完結方式となっています。しかしながら、全ての話は戦闘攻撃機「爆風」をめぐる、人々のドラマで共通しています。

この作品の中では、空技廠が開発していた13試艦上爆撃機（史実の「彗星」）が、ドイツと行っていたDB601エンジンのライセンス契約打ち切りによって開発が頓挫した所から始まります。

このため、日本海軍は次期新型爆撃機の開発が危機的状況に陥ります。そんな中で、99式艦爆を開発した愛知時計電気は、自ら爆撃機としても使用できる13試艦攻の開発提案を行い、開発を進めます。

13試艦爆が小型で精緻すぎた設計のため開発がまごつく一方、13試艦攻は順調にテストをパスし、ついに昭和17年に艦上攻撃機「爆風」としてデビューします。

「爆風」の特徴は、馬力のある強力なエンジン、強力な武装と爆装、発艦促進用のRATOロケット装備、主脚の距離を稼ぐために採用された逆ガル翼とその主脚をダイブブレーキとすること。そして、人的損耗を抑えるために誘導役をのぞきその生産を単座に置いたこととなっています。

そうした一方で、基本的に機体設計や装備したエンジンは手堅く纏められており、就役後のトラブルは許容範囲内となっています。また強力なエンジンや大柄な機体を採用しているため、発展性の高い機体ともなっています。

作中ではそうした利点を生かして、エンジンを換装した攻撃機タイプに留まらず、両翼に37mm砲を搭載した地上攻撃機型、局地戦闘機型の25型など多彩な改良型が登場します。

登場時期は先行試作型がミッドウェー海戦から投入され、さらに量産型はガダルカナル島をめぐる戦いに機動部隊ならびに基地航空隊双方へと投入され、当に日本海軍にとって絶妙な時期となりました。

さらにすごいのは、改良型の14型ではそのペイロードを生かして、戦艦「大和」の主砲砲弾を改造した160番爆弾、通称「大和弾」の搭載が可能となり、一撃で敵空母を轟沈へと至らしめる能力を付加されています。

なお、米軍の愛称は「Harpy」となっています。

私見としましては、たった1機種でありながら改良バリエーションの豊富さから、兵器としての魅力に溢れており、また汎用性の高さから様々な任務に投入され、ストーリーも多岐に渡っています。開発の経緯も、そこまでの外れではなく、納得できる内容となっています。

シリーズ自体も内田先生らしい独特のキャラクターも加わって、非常に興味深い作品です。惜しむべきは、ここ最近の架空戦記と同じく3巻程度の短いシリーズで終わってしまったことです。

帝国海軍艦上戦闘爆撃機「爆風」12型（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

零式艦上戦闘機

これまでもこのシリーズで零戦を基にした架空機を紹介してきましたが、実際の所架空戦記における零戦の立ち位置について、少しばかり検討したいと思います。

架空戦記における零戦登場のパターンは、詳細に分ければ多いですが、今回は大まかに以下の3通りにわけます。

？実在した零戦を使う、もしくはそれに小規模な手を加えたのみのタイプを登場させる。

？零戦と言う名がつくが、実在した機体とは全く異なる、もしくは異なるほどの改修を受けている。

？そもそも零戦自体が出てこない。

？の場合に該当する作品としては、主に高貫布士先生や菅谷充先生の作品があたります。このお2人の作品に登場する零戦は実在、少なくとも机上のプランに登場した機体となっています。また、新参の架空戦記の先生、もしくは他のジャンルから入ってきた先生の場合も基本的に実在する零戦をそのまま使う傾向が多いように見受けられます。

もちろん、そうした人の中でも志茂田景喜先生の零戦88型や、超零戦のような例外も見られます。

零戦88型（空白はデータ無し）

全長 全幅 自重

速度770 km 航続力3850 km

武装25 mm機銃2基

12.7 mm機銃2基

発動機「栄」101型空冷2100馬力1基。

また、この他に以前紹介した檀良彦先生の「黎明の艦隊」に登場した「零戦改」や「瑞電」、川又千秋先生の「ラバウル烈風空戦録」に登場した零戦42乙型もこれにあたるでしょう。

ちょっと変わったのだと、中岡潤一郎先生の「スカーレット・ストーム」に登場する零戦32型で、この機体の場合、女子パイロットでも操縦しやすいよう操縦性を改善したとなっています。ただし、機体そのものは史実のそれとあまり変わらないものであったようです。

次に？の場合もそれなり見られるパターンです。例えば安芸一穂先生の「旭日旗往く！」では零戦に液冷のマリーンエンジンを搭載した33型、さらにグリフォンエンジンを搭載した34型と言う機種が登場します。

零式艦上戦闘機34型

全長 全幅 自重

速力 645 km 航続力 1800 km

武装 20 mm 機銃 2 基

12.7 mm 機銃 2 基

発動機「グリフォン」液令

英国名「レイF13」

他に羅門祐人先生の「青き波濤」シリーズでは、転移した未来の日本の技術を使った、ターボプロップ搭載の零戦69型という機首が登場します。ここまで来ると、零戦という名前だけ引き継いだ別物の感が強いですね。

ちなみに、この零戦を未来技術による魔改造は羅門ワールドでよく見られることで、他の複数の作品にも見られます。また羅門先生は架空戦記作家の中でも、屈指の架空兵器考案者で、零戦だけ見てもかなりの数のバリエーションを登場させています。

さらに、かなり珍しい所では日向仁先生の「中島零戦物語」ではタイトル通り、史実では零戦の開発を蹴った中島が開発に参加し、自社製零戦を海軍に採用させると言うストーリーとなっています。

次に？については、独自の歴史世界を作り上げる羅門祐人先生や中岡潤一郎先生の作品に見られる傾向です。

羅門先生の場合、例えば信長が天下統一を成し遂げ、その後織田家が日本の元首となった世界を舞台にした「霸王の軍」、黒島亀人が預言者となって空軍が設立されて太平洋戦争の歴史が改変された「紅の翼」、そもそも零戦が開発される条件自体が消失しているため、零戦が登場しません。

同様の話は林譲治先生の「大日本帝国航空隊戦記」等にも当てはまります。

こうした作品の場合、1式艦上戦闘機（「紅の翼」）や98式戦闘機、40式戦闘機など零戦の採用年度に近い機体が登場しますが、零戦とは全く異なる飛行機となっている場合が多いです。

1式艦上戦闘機21型

全長9.5m

全幅12m

自重3100kg

速力540km

航続力3500km

武装12.7mm機銃4基

発動機「魁」14型空冷1200馬力

日本で最も有名なレシプロ戦闘機の零戦。しかしながら、架空戦記の世界には皆さんが見たこともない零戦が羽ばたいているようです。

零式艦上戦闘機（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国第二海軍駆逐艦「撫子」

帝国第二海軍駆逐艦「撫子」

全長 排水量 速力

武装

機関

同型艦「桜」「椿」「桔梗」「月見草」「白梅」「水芭蕉」「薊」

今回紹介するのは、中岡潤一郎先生原作の「スカーレット・ストーム 第二海軍物語」に登場した対空駆逐艦「撫子」です。

この小説の世界では、1908年のシベリア・ツングースカ上空での隕石の爆発による影響で、男女の出生比率が大きく狂い、生まれてくる子供の8割が女子と言う異常事態になってしまいます。

そのため、それまでの各国における男性優位の世界は完全に崩壊し、様々な分野に女性が進出しなければならない事態となります。

それは軍事においても同様で、日本海軍も止む無く女性兵士の受け入れを行います。これまで女人禁制で来た帝国海軍としては、そのまま女子兵を受け入れるわけにはいきません。そこで女子を主体とする第二海軍と、それに伴う教育機関を設置します。

第二海軍は男性だけの第一海軍（従来の海軍）に対して、第一海

軍からの余剰人員と女子兵から構成され、第一海軍の補助と言う位置づけで出発します。

しかしながら、男性人口の減少と言う厳しい現実の前に、第一海軍の規模縮小、比例する形での第二海軍の拡張となっていく、この状況でアメリカ合衆国との戦争状態に突入します。

ちなみにアメリカ合衆国との開戦理由は、アメリカが本国での凶作による食糧不足の影響による、諸外国との摩擦が発端となっています。（間違っているかもしれませんが）

規模を縮小された第一海軍は、わずかな空母を除いて主に戦艦主体の砲戦部隊となっています。対して第二海軍は空母護衛用の高速戦艦を除けば、空母主体の機動部隊が中心の部隊になっています。

そのため、第二海軍は米海軍機動部隊との熾烈な海空戦を戦うこととなります。

作品自体は、主人公である男性中佐が第二海軍に配属され、乗り込んだ空母「飛龍」とそこで出会った女性少佐を中心とした物語として書かれています。

そしてこの作品、色々ネタが多いんです。例えば、とある女子の雷撃機ペアが「紅の三連星」と呼ばれていたり、艦内で同人誌が発行されていたりと言った具合に。

それはさて置き、今回紹介した「撫子」級は、前述したとおり機動部隊を守る対空駆逐艦として登場します。具体的なスペックは記されていませんでしたが、艦隊の編成表に「秋月」級がないため、この代替型と思われます。

またこの艦の特徴としては、乗員が全員女性となっていることです！！

作中に登場する「飛龍」なども、女性乗員が乗り込んでいる設定となっていますが、艦長などベテランが必要とされる部分には、男性乗員が残されています。

駆逐艦の場合艦長に至っても若い年齢の人が乗組む場合がありますから、こう言う現象も当然おきてくるんでしょうね。

また作中では、潜水艦部隊には一切女性兵士が乗り込んでいないと言う記述もあります、これは女性兵士が乗り込んだ結果、艦が運用不能な状態に陥ったせいとなっています・・・何が起きた！？

私見としましては、特に無理な設定と言うわけではなく、架空艦艇の名前としては非常に好きです。ただし、作中では女性兵士が最前線で戦う生々しいシーンもあるので、読むほうはある程度覚悟しておく必要があるでしょう。

それを除けば中々に熱い作品で、全3部作となっています。既に発行していた銀河出版が架空戦記の出版を休止して久しく、新刊として手に入れるのは難しいですが、古本屋などには時たま流通しているので、読みたい方はそちらを探すとよろしいでしょう。

帝国第二海軍駆逐艦「撫子」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍装甲巡洋艦「赤石」

帝国海軍装甲巡洋艦「赤石」

全長 排水量31400t

速力32ノット

武装30、5cm砲9門

10cm砲16門

噴進砲6基

回転翼機2機

同型艦「愛鷹」「岩木」「妙義」

今回紹介するのは安芸一穂先生の「旭日旗往く」シリーズに登場した装甲巡洋艦「赤石」級です。装甲巡洋艦と呼称されていますが、明らかに史実でも計画された超甲巡です。

超甲巡を登場させる作品はこれまでも何作もあり、例えば佐藤大輔先生の短編に登場した「穂高」級、内田弘樹先生の作品に登場した「剣」級、そして羅門祐人先生の作品に登場した「相模」級などです。

これらは名前こそ違っていますが、大体のスペックは同じ（ネタ元が同じだから当然か？）で、建造の経緯も戦艦不足を補うためと言う「相模」級を除けば夜戦用艦艇である点で同じです。

ところが「赤石」級の場合は少々事情が違います。何故なら、「赤石」級は戦艦が建造できないから止む無く建造されたと言ったかなり変わった理由で建造されたからです。

実はこの「旭日旗往く」シリーズでは、昭和11年に小笠原事変という偶発的な日米間の紛争が発生しています。この戦いで日本の連合艦隊は荒天下と言う状況も加わって、戦艦「比叡」や空母「加賀」を失うという大敗北を喫してしまい、南洋諸島の統治権を米国に譲渡し、さらに厳しい軍備制限を突きつけられます。また満州の権益も失われてしまいます。もちろん、当然ながら軍部の勢いは衰えます。

戦艦の保有を「長門」「陸奥」「霧島」「日向」のみに制限されたのみならず、新規建造も止められてしまった日本海軍は、止む無くワンランク下の「赤石」級を建造することとなります。

アメリカとの武力衝突の後、史実のような日本の覇権主義は衰えます。そして日本は英国に接近し、英国と共に第二次世界大戦を戦います。

苦心の末ナチス・ドイツとの戦争を勝利に終わらせた日英ですが、今度は米仏蘭などとの間に緊張が走ります。原因は戦後アジア各地の独立を後押しする日英やアジア各国と、植民地主義を押し通す米仏蘭との勢力争いです。

日本海軍は英国の協力の元海外で「大和」級を建造し、さらに英国から「ライオン」級戦艦を購入して不足する戦艦の穴を埋めますが、当然それだけでは足りず「赤石」級も戦艦に混じって米仏蘭艦艇に対して熱い砲撃戦を展開します。

特に特徴があるわけでもなく、作中でも多数登場する艦艇の1隻（むしろ空母「沖鷹」やコルベットの「東京」の方が活躍している）に過ぎませんが、個人的には超甲巡という種類の艦艇と、日英対米

仏蘭と言う構図が好きなので、取り上げてみました。

帝国海軍装甲巡洋艦「赤石」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

東露西亞帝国兵器集 1

東露西亞帝国空軍戦闘機Se1「プチーラー」

全長 全幅 自重

速力300km 航続力

武装7.7mm機銃1基

12.7mm機銃1基

発動機 P & W「ワスプ」空冷600馬力

今回と次回は、ちょうど並行連載している「交差する世界」で高貫先生の「双頭鷲の紋章」シリーズに出てくる架空の国家、東露西亞帝国を登場させたので、東露西亞帝国空軍の戦闘機や爆撃機、戦車について紹介したいと思います。

まず最初に紹介した「プチーラー」（ロシア語でスズメバチ）戦闘機は、作中で出てくる装甲飛行船の艦載機として登場しています。

飛行船に航空機を搭載する試みは、アメリカ海軍が行った「メイコン」が有名です。ただし、いずれも早い段階で事故で失われ、影の薄い状態です。その航空機搭載飛行船を持つてくる辺りが、高貫作品の真骨頂とも言えましょう。

なお「プチーラー」戦闘機はオリジナルではなく、米海軍より購入したF9C「スパロー」戦闘機の設計図を元に、リバプリック社が改造して、東露西亞帝国に売り込んだ機体となっています。

挿絵にも登場しており、飛行船に収容される際のフックが印象的なシルエットを醸し出しています。

S e 2「ジャーチル」戦闘機

全長 全幅 自重

速度 450 km 航続力

武装 12, 7 mm 機銃 2 基

発動機 空冷 1000 馬力

こちらは至って普通の単葉戦闘機で、東露帝国空軍がアメリカのセバスキー社から購入した P 35 戦闘機の小改良機となっています。

しかしながら、この「ジャーチル」戦闘機はソ連戦闘機に対抗できる性能を持ちながら、アメリカ政府の妨害（作中ではアメリカが東露ではなくソ連よりの国家であり、アラスカの併合を目論んでいます）によって必要数に達する前に輸出禁止となってしまう。

ちなみに「ジャーチル」は啄木鳥のことです。

S n a 1「ヴェラーヴェイ」戦闘機

全長 全幅 自重

速度 430 km 航続力

武装 7, 7 mm 機銃 2 基

発動機 P & W 空冷 600 馬力

アメリカからの戦闘機購入の道が断たれたため、東露帝国は急遽戦闘機の購入先をシフトします。

そのシフト先となったのが、日本の中島飛行機でした。なお、この作品では中島飛行機の中島社長と、シコルスキー社のシコルスキー社長が、新型爆撃機のお披露目会を通じて友人関係になっています。

S n a 1 戦闘機もSはシコルスキー、n aは中島の略号です。

この機体は中島が開発して没になったP A機を元に、東露西亞帝國向けに改良を施した戦闘機で、対爆撃機用邀撃機のS e 2に対して、対戦闘機用の機体となっています。

またエンジンの取り付け部分は、アメリカ製のワスプやイギリス製のジュピターに換装可能となっています。さらには、飛行船搭載用の改造機まで登場しています。

なお「ヴェラーヴェイ」は雀の意味です。

後編へ続く。

東露西亞帝国兵器集 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

東露西亞帝国兵器集 2

東露西亞帝国空軍重爆撃機Si8「イリヤ・ムウロメツ」

全長 全幅50m以上 自重

速力 航続力

武装 爆装

発動機 1000馬力級空冷6基

前回に引き続き今回も東露軍の兵器を紹介していきます。

一番手のSi8型爆撃機は、1933年に試作機が完成した渡洋爆撃機です。

設計はイゴール・シコルスキーで、後に実用的なヘリコプターを開発する技術者です。しかしながら、私もこの作品も読んで初めて知りましたが、世界初の本格的な4発爆撃機を開発した技術者でもあります。

残念ながら詳細なデータは作中では明かされていませんが、6発機で当初はイスパノ系の液冷エンジンを搭載していましたが、後に米国製の1000馬力級空冷に換装したとしています。またこの時点では珍しくない大気圏構造を採用していると記されています。

「双頭鷲の紋章」シリーズでは、シコルスキーがその手腕が見込まれ上記のSi8型爆撃機、さらにそれを発展させたSi9型爆撃機の開発を託されています。

さらにすごいのは、このSi8型には空中給油型が存在しており、

アラスカ

東露帝国から遠くソ連奥地への爆撃を可能としたことです。

作中では満州で日本軍との演習に参加後、荷物用コンテナに偽装した爆弾を搭載し、ウラジオストク近郊の空軍基地を12機で爆撃。同地の200機近いソ連軍爆撃機を破壊する戦果を残しました。

同空軍偵察機Mna1型

全長 全幅 自重

速力430km 航続力6000km

発動機 ライトサイクロンR1820空冷1200馬力2基

こちらは日本から購入した96式陸攻の改造偵察機。Mnaは製造元の三菱と改造した中島の呼称です。作中では高速長距離偵察機として使われていました。

同空軍中型爆撃機Si19

全長 全幅 自重

速力410km 航続力2500km

武装 爆装1t

発動機マーキュリー?920馬力またはペガサス17型1000馬力空冷2基

こちらも日本からの購入機で、史実のキ19です。中島のキ19は97式重爆として採用された三菱のキ21と競争試作しましたが、結局お蔵入りしました。

「双頭鷲の紋章」シリーズでは、この機体のライセンス権をシコルスキー社が買い東露帝国向けに生産しています。性能を見る限りで

は、ソ連軍のSBともタメを張れる機体です。

なお東露軍の機体で日本が生産したにもかかわらずアメリカやイギリス製エンジンを積んでいるのは、入手の容易さからです。

同陸軍TT5型多砲塔戦車

全長9 m	全幅3 , 4 m	自重60 t
速力30 km	航続力300 km	乗員10名
武装75 mm戦車砲1門	装甲最大60 mm	
57 mm戦車砲1門		
7 , 7 mm機関銃4基		

発動機MO205 液冷900馬力

第3巻のノモンハン事変に登場する多砲塔戦車です。多砲塔戦車は夢のある乗り物ですが、残念ながら史実においては全く活躍出来ずに終わりました。

しかしながら、このTT5型戦車は強力なエンジンとサスペンションシステムで高い運動性能を確立し、さらに無線機や数を揃えた支援用の高速戦車と共同戦線を張ることで、その図体のデカサによるデメリットを何とか補っています。

なお、この戦車はアラスカではなく満州国の中島・東露合併系企業で生産されているという設定です。そのため同車を有する部隊も満州で実験並びに教育目的で配置されています。

もっとも、作中では戦車の性能とかよりもあの日本陸軍の戦車戦

の英雄池田大佐とアレクサンドル皇女指揮の元での活躍シーンの方が面白いと言えますが。

同陸軍快速戦車CT3型

全長	全幅	自重
速力	航続力	
武装57mm対戦車砲1門	装甲厚	乗員

こちらはクリスティー式戦車を発展させた車両と言う設定ですが、オリジナルにはない改良点が幾つか加えられています。

また主砲も海軍の速射砲を発展させた57mm砲で、ソ連側の45mm砲に対して優位に立っています。

多砲塔戦車に加えて、このような戦車まで忠実させられる所は、さすが金持ち国家と言つところですよ。

東露西亞帝国兵器集 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍航空母艦「蒼鷹」

帝国海軍航空母艦「白鷹」

全長

排水量

速力25ノット

武装

搭載機27機

同型艦「若鷹」「蒼鷹」

今回紹介するのは、高貫布士先生の「絶対国防圏を死守せよ」に登場した商船改造航空母艦です。

日本海軍における商船改造航空母艦はカタパルトなどの艤装や、搭載機に恵まれなかったこともあって不十分な活躍のまま終わってしまったことは周知の事実です。

しかしながら、これらの航空母艦も全く活躍しなかったわけではありません。特にトラック方面への航空機輸送では大量の航空機を南東方面戦線へと送り込み、心細い日本の補給戦を多少なりと補強することに成功しました。

そうした商船改造空母に関しても、机上の計画のまま終わってしまった艦も多数あります。特にミッドウェー海戦後の航空母艦不足を補うため、少しでも高速で大型の商船は改造対象となりました。

しかしながら、結局一部を除きそれらは計画倒れで終わりました。

一方で戦前に既に計画されながら、結局工事が行われなかった船もあります。それが「浅間丸」級客船の改装計画でした。

「浅間丸」級は戦前横浜からサンフランシスコ間を結ぶ太平洋横断航路において一世を風靡した日本郵船の豪華客船でした。

全長178m、排水量1万7千t、速力20ノットの性能を誇り、その設備は当時の欧米客船に引けをとらないものでした。

帝国海軍では早くからこの「浅間丸」級の空母化改造を計画し、そのための資材や改造工事内容まで準備していました。

その後より大型で高速の「新田丸」級を海軍からの予算補助の元で行うことが決まり、「新田丸」級が空母化改造対象となったため、結局「浅間丸」級改造空母は登場せず、姉妹船3隻はいずれも陸海軍輸送船として徴傭中に戦没しました。

そんな「浅間丸」級改造空母ですが、架空戦記では度々登場します。名前は様々ですが、当時の海軍の改造航空母艦が全て最後に鷹の字が来ることから「〇〇鷹」とつけられることが多いです。

なお「浅間丸」級は当初から全長が短く、航空機の運用に難があるとして、改造時には機関出力を増大させるための改装を計画していました。

また当時の日本の改造空母は、英米のそれが戦後貨客船への復帰が可能な程度の改装であったのに対して、それが不可能なほど徹底した軍艦化改造でした。

客船として最後を迎えるのか、それとも航空母艦として最後を迎えるのか、どちらが船にとって幸せなのかは図りかねるところです。

私見ですが、例えば3隻といえど改装空母が史実より多く配置されていれば、ラバウルやトラックへの航空機輸送はより活発なものとなり、多少なりと戦局に貢献できたかもしれません。一方で、本来貨客船として資源や人員を輸送するほうが、効率的だったかもしれません。

一番理想的なのは、英米式の護衛空母として運用できるだけの装備と航空機がそろえられることです。

帝国海軍航空母艦「蒼鷹」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

独立日本艦隊戦艦「坂本」

独立日本艦隊戦艦「坂本」

全長216m 排水量48200t

速力27ノット

武装40cm砲4門

20 / 3cm砲2門

10cm高角砲12門

20mm機銃20挺

12 / 7mm機銃20挺

水偵2基

同型艦「榎本」

この艦は2年前に紹介した羅門祐人先生の作品「独立日本艦隊」シリーズに登場した戦艦です。

独立日本艦隊は以前にも紹介しましたが、史実では第一次大戦後の恐慌によって経営破たんした鈴木商店が台湾銀行からの融資を受けた代償として、植民地防衛用海軍を創設することとなり、その結果生まれた艦隊です。

平時は日本航路警備の名の元で、海防艦や駆逐艦が海賊対策として戦闘行為を行い、戦時になると所有している各種貨物船などの民間船舶を改装し、戦艦・空母として竣工させて帝国海軍の補助として働かせるというものでした。

今回紹介した「坂本」級戦艦も、なんと鉱石貨物船からの改造艦となつています。主砲を積むスペースは元は船倉だったスペースを活用するとともに、元から短期間での改装を意識した設計となつています。

もちろん、本当の戦艦との戦闘はそもそも想定されていません。あくまで海軍の補助として働きますから、その主任務は格下の艦艇や対地砲撃、航空母艦護衛となつています。

ちなみに独立日本艦隊は、巡洋艦・空母・駆逐艦・海防艦・水上機母艦を保有しており、確かに海軍の補助となつていますが、駆逐艦と海防艦を除けばいずれも商船改造で、航空機も一回り小さい軽航空機となっており、正規の海軍と戦うにはちよつと苦しい部分が……はつきり言つて運用方針がよくわからない。

また艦隊の運用理念も損得で考えられており、「坂本」の主砲も元をとるために砲身命数を伸ばす意味から弱装弾を使用している描写があります。

この小説内では、経済に関する話がかなり出てきますがはつきりいつてこのような艦隊を造ること自体非経済的な気がしてならない

……

これならば同時期に始まつた林先生の「興国の楯」の方が、まだその方面での設定がしっかりしている気がします。

しかも題名的にはスチャラカ戦記の「独立愚連艦隊」に似ているにも関わらず、内容は180度真逆かつお堅い内容なので、娯楽性と言つ意味からもパツとしませんでした。

戦闘シーンなどもどちらかと言うと地味なので、盛り上がりにかけた作品となっていました。

一方で「興国の楯」と同じく戦時経済などの概念を戦記小説に盛り込んだ点など、評価できる点も多数あるのも確かです。

なお「坂本」級戦艦の命名基準は人物名となっています。

私見としては、艦自体は架空艦艇を色々思いつく羅門先生らしいものであると同時に、もう少し有効活用できなかったと思っと思っています。羅門先生の場合、設定だけが先行してる気が……

だけど読んでいるその時は読み流せるから不思議だ？

独立日本艦隊戦艦「坂本」(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

ドイツ水上艦隊考察 上

史実におけるドイツ海軍（ここでは水上艦隊）は、陸軍国家ゆえに小粒ながらピリリと辛い艦艇が揃っていたユニークな海軍でした。

欧州最強と言われた「ビスマルク」級。未完成に終わった「グラーフ・ツェッペリン」をはじめとする空母群。平凡な性能ながら如何にも堅牢な概観の巡洋戦艦「シャルンホルスト」級、重巡「アドミラル・ヒッパー」級等。

残念ながら、これらユニークな艦艇たちも圧倒的な戦力差を誇る英国海軍艦隊に抗える筈も無く、加えてヒトラーをはじめとする首脳陣の運用方針の間違いから活躍できる場面でさえその動きを制限され、「ビスマルク」や「アドミラル・グラーフ・シュペー」のように海軍史に残る活躍をした艦艇もありましたが、いずれも撃沈されてしまいました。

そしてドイツ海軍水上艦隊は終戦間際にはバルト海沿岸部でのソ連軍への砲撃に参加した程度で戦争の終結を迎えます。せめてもの慰めは、ソ連軍が迫る東プロイセンから多くの民間人を脱出させられたことでしょうか。

さて、史実ではあまり活躍出来なかったドイツ水上艦隊ですが、架空戦記ではどうでしょうか？

まずアニメ化もされた「紺碧の艦隊」シリーズと「旭日の艦隊」シリーズ。この両作品では、ヨーロッパを制覇し、南米・アフリカ・亜細亜へと触手を伸ばすドイツ第3帝国が、その野望の前に立ちはだかるであろう日米海軍に対抗するべく機動艦隊を造り上げます。

しかしながらDVD特典によれば、第三帝国水上艦隊の勢力は開戦時で史実とほぼ同じ。昭和20年8月15日時点でも「グラーフ・ツエッペリン」が竣工し、地中海艦隊向けにいくらかの戦艦や巡洋戦艦が完成している程度のものでしかありません。

しかも、それらの艦艇は日本が宣戦すると真つ先に旭日艦隊と紺碧艦隊によって壊滅させられてしまいました。

そして英国を事実上降した昭和22年から地中海を造船拠点に第一から第四までの4個機動艦隊が創設されています。その中核を担ったのが、アングルドデッキを装備し、ジェット艦載機を運用できる「リヒトフオーフェン」級空母でした。

しかしながら、これらの空母は搭載機が40機から60機程度と小さく、おまけに短期間に大量建造されたため粗製乱造の上に乗員の訓練不足での出撃を余儀なくされ、結局日本艦隊との戦闘の前に全滅の憂き目にあいます。占領下の英国で建造された艦艇に至っては、艦艇としてともに運用することさえ困難な物さえあったと言う設定になっています。

結局のところ、体のいいやられ役に終始してしまいました。

こうしたやられ役パターンとしては、他に羅門祐人先生の「独立愚連艦隊」もありました。こちらの作品では巨大戦艦の「アドルフ・ヒトラー」とか固定砲塔搭載の装甲艦とか、現代のメガフロートを生髯とさせる滑走路艦、さらに誘導対空ミサイルなどユニークな兵器が大量に登場しましたが、いずれもあっけなくやられています。

「陸軍国家が海軍を持つものじゃない」と言う突込みまでされる

コテンパンぶりです。

では全く活躍しないかと言えば、決してそうではありません。

これについては幾つかパターンがあります。一つは「グラフ・ツエツペリン」大活躍。二つ目は鹵獲艦隊大活躍。もう一つはZ計画艦艇大活躍です。

これらについては次回更新で紹介したいと思います。

ドイツ水上艦隊考察 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ドイツ水上艦隊考察 中

前回に引き続き、今回も架空戦記におけるドイツ水上艦隊の活躍について書いていきたいと思います。

前回はドイツ艦隊がやられ役に終始した作品を紹介しましたが、今回は逆に味方として活躍するか、もしくは魅力的な敵役ポジションを得ている作品を紹介したいと思います。

ドイツ水上艦隊が活躍する話にもパターンが見られます。一つ目は空母「グラーフ・ツェッペリン」が大活躍するものです。

史実における「グラーフ・ツェッペリン」はZ艦隊で計画された空母2隻の内の1隻であり、進水にまで漕ぎ着けました。ところが1939年9月の第二次大戦勃発により、他のZ艦隊計画艦艇と同じく工事中止に追い込まれてしまいます。

その後工事が再開されたこともありましたが、結局の所終戦までに完成しないままソ連軍の拿捕する所隣、その後ソ連への曳航中に北海にて沈没し失われました。

未完成で終わったドイツ最初の空母という立場ゆえか、架空戦記では「グラーフ・ツェッペリン」単体、もしくは彼女を主役に据えた作品が何作があります。

代表的なのが佐藤俊之先生の、そのものズバリな「グラーフ・ツェッペリン」出撃。この作中では戦艦「テルピッツ」が竣工間際でイギリスコマンドの破壊工作で横転沈没し、代わりに「グラーフ・ツェッペリン」が竣工している設定となっています。

そして「グラフ・ツェッペリン」はライン演習作戦に「ビスマルク」と共に出撃し、英国艦隊との決戦に勝利するという筋書きです。

次に原田治先生の「亜細亜の荒鷲」。こちらは史実よりも早く竣工した「グラフ・ツェッペリン」の運用に、日本から空母の運用技術供与のために派遣された空母「鳳翔」が協力し、さらに艦載機である零戦と97式艦上攻撃機を売却し、これらを得た「グラフ・ツェッペリン」が大活躍するストーリーです。

さらに神谷隆一先生の「ドイツ機動艦隊出撃」。こちらも史実とは違い早めに竣工した「グラフ・ツェッペリン」の活躍する話です。ただし、何故か早々に欧州での活動を打ち切って亜細亜に回航、太平洋戦線に参戦すると言う少しばかり理解に苦しむ設定となっています。

いずれの3作品とも「グラフ・ツェッペリン」とそれに援護された水上艦隊大活躍のシリーズなのですが、日本で書かれた小説らしく全て日本人がストーリーに関わっています。加えて、1本もので終わってしまったのも共通です……

「グラフ・ツェッペリン」には呪いでも掛かっているのかな？

なおその他の作品でも、水上艦隊が登場すれば必ず名前だけ出てきます。ただし、実際の「グラフ・ツェッペリン」は通商破壊もしくは防空目的の艦であつたために、艦載機が少ないと言う空母としては大きな弱点を抱えていました。

架空戦記でも、その弱点が足を引っ張る場合が多いんですね。

そのため、活躍させようと思うと使用海域や使用時期、戦術に大いに工夫をしないと、史実以上の悲劇で終わるだけかもしれません。

ドイツ水上艦隊考察 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ドイツ水上艦隊考察 下

架空戦記に関するドイツ水上艦隊に関する考察の3回目。今回は前回までのパターンとは違う、ドイツ海軍水上艦隊全体が活躍するお話を紹介していきます。

まず最初にあげるのが、安芸一穂先生の「旭日の戦旗」。このシリーズでは日本がアメリカと満州国を共同開発した結果、満州にはアメリカに似た多民族国家が形成され、韓国は独立したまま。そして、日本はアメリカの同盟国となっています。

一方ヨーロッパにおいてはナチス・ドイツが史実通りヨーロッパを席卷し、ダンケルクで撤退中の英米軍を撃破し、そのままの勢いで英国を陥落させます。

英仏を陥落させたドイツは同国の海軍を接收、或いは自軍の編成に組み込んで水上艦隊を増強するとともに、中東へと兵を進めます。さらに太平洋のフランス植民地などにも兵を派遣し、最終的に日米陣営と対決を迎えます。

なおこの作品ではソ連はドイツの同盟国として日米と戦っています。

ドイツ海軍は史実の「ビスマルク」級に加えて、40cm砲搭載の「フリードリヒ・デアグロッセ」級や英国から捕獲し改装した元「キングジョージ5世」級、さらには「クイーンエリザベス」級。空母も「グラーフ・ツェッペリン」に加えて捕獲した「フォーミダブル」などを戦列に加えて、さらにヴィシーフランス艦隊も加わった一大機動部隊を創設し、インド洋へと艦隊を派遣し、日米連合艦

隊と機動部隊同士の対決を挑みます。

しかしながら、日米軍も「大和」級や亡命英海軍の「プリンス・オブ・ウェールズ」まで加えた艦隊を派遣して迎撃し、その結果独仏艦隊は潰走します。特にスゴイのは、「大和」が初弾で「シエアー」を撃沈するシーン。

なおドイツ側は日本人を二等民族扱いしているので、「大和」級の様な戦艦を建造できないと判断する他の作品ではアメリカ人がやるようなミスを犯しています。

ちなみに、同じ作者による「暁の旭日旗」ではソ連海軍がドイツ艦艇を接收して極東に回航して日本艦隊と一戦を交えるシーンがあり、これもある意味ドイツ艦隊の活躍と言えます。

ドイツ海軍が英仏からの捕獲艦艇で強化するのは、他の作品でも見られる手です。もっとも、これは簡単に言えばドイツ単体で水上艦隊を整備するのは、史実でレーダー提督が言ったとおりかなり無理をしなければならぬと言えます。

他の先生でこの手を良く使つのは「横山信義」先生です。しかもさすがに大艦巨砲主義作品の大御所だけあって、必ずと言ってよいほど熱い砲撃戦を展開してくれます。

特に「鋼鉄の海嘯」シリーズは中でも極上の作品と言えます。

こうした捕獲艦には大概「ザクセン」と言う地名か「モルトケ」と言う人名がつけられています。

他の作品でもドイツ水上艦隊が活躍する例は幾つかあります。特に羅門祐人先生はドイツ艦隊+「アドルフ・ヒトラー」級戦艦と言っセツトで活躍させますが、こちらは戦略的視点の作品が多いため、海戦内容はかなりさっぱりしていると言えましょう。

かなり古い作品ですが、吉岡平先生の作品である「凍てる波濤」では連合国を下した枢軸国同士が争いを激化し、ドイツ海軍が北太平洋に18インチ砲8門を搭載する戦艦8隻(ちなみに何故か戦艦だけ)を派遣し、日本連合艦隊と壮絶な砲撃戦を行っています。

またこの「凍てる波濤」世界ではドイツ海軍が「ビスマルク」級と「シャルンホルスト」級を10隻以上量産しています。な・に・が・あつた!?

こうした作品以外にも、ワンシーンなどではありますが「シュペー」が自沈していない、ノルマンディー上陸作戦にドイツ残存艦隊突入などのシーンがある作品もあります。

史実では残念な結果に終わったドイツ水上艦隊は、架空戦記内ではかなり活躍しているようです。

ドイツ水上艦隊考察 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

帝国海軍零式艦上戦闘機（中島製）

帝国海軍零式艦上戦闘機（中島製）

全長 9 / 8 m 全幅 1 1 / 3 m 自重 3 8 0 0 k g

速力 航続力

武装 2 0 m m 機銃 2 基

1 2 / 7 m m 機銃 2 基

発動機「金星」空冷 1 2 0 0 馬力

何を今さら零式艦上戦闘機を取り上げるんだと思われるのですが、実はこの機体設計と製造を行なったのが三菱ではなく中島なのです。

この機体が登場したのは日向仁先生の「中島零戦物語」と言う作品です。作品名から推察すると、中島製の零戦が活躍する作品かと思いきや、戦闘シーンは冒頭と終盤にわずかにあるのみで、そのほとんどは技術者による開発の過程によって成り立っています。

史実でも零戦は三菱並びに中島へと試作依頼が出ましたが、中島がこれを蹴ったために三菱一社の独壇場となり、史実の零戦の登場と相成りました。

長い航続力に高い旋回性能、そして 2 0 m m と言う重爆撃機に対処することも可能な大口径機銃を搭載した史実零戦の活躍は、もはや語るべくもないことでしょう。

しかし、この作品ではその中島に主人公となる1人の若き技術者が登場、彼を主任設計師として中島製の12試艦上戦闘機の開発が行われます。

三菱の機体が海軍の要求どおりの性能を引き出すべく設計を行なったのに対して、中島は一部の点で妥協して独自の理念の元で設計をしているのが、この作品の肝です。

具体的には生産の工場を目指すための機体の一部に木製品の採用、より強力な武装やエンジンの採用などです。

こうした大胆な設計の結果、最終的な採用を決定する模擬空戦で中島製の機体は三菱製の機体に勝利し、中島製の機体が零式艦上戦闘機として採用されます。

なお表紙の挿絵などから推察するに、かなり史実の「疾風」に似た風貌の機体となっています。

速力や航続力に関するデータがありませんので、具体的な数値は不明です。ただし、航続力に関しては妥協した性能となっているため、三菱製の機体に比べて短くなってしまいました。

さて、史実の零戦はその長い航続力があつたからこそ、台湾からフィリピンへの長距離往復渡洋爆撃と言う前代未聞の作戦を行うことができました。

ところが、この作品では航続力が短くなってしまったので、やむなく第一機動部隊の空母をフィリピン攻略作戦に投入し、真珠湾奇襲計画がなくなっています。

その後の戦争の経過はわかりませんが、冒頭のエピソード（間違いはありません）を読む限りではこの零戦も酷使されたあげく敗戦を止められなかったようです。うーん、残念。

前述したように、作品の9割が主人公が中島零戦を開発するページに割かれているので、戦争の経過などは全くわかりません。もちろん、それは悪いことではありません。海軍の設計要求に対する妥協と独自の解釈を用いた開発や、試験飛行や事故などよく書き込まれています。

しかし、一方でこうした機体が製造できたなら戦争の経過にも大きな変化があったのではと考えてしまうのは、私だけではないでしょう。

かなり古い作品ですが、古本屋などにはまだあるかもしれません。

帝国海軍零式艦上戦闘機（中島製）（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2725c/>

架空艦隊出撃せよ！！

2011年12月2日14時53分発行